

547
85

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





大正
15. 1. 16
内交

自序

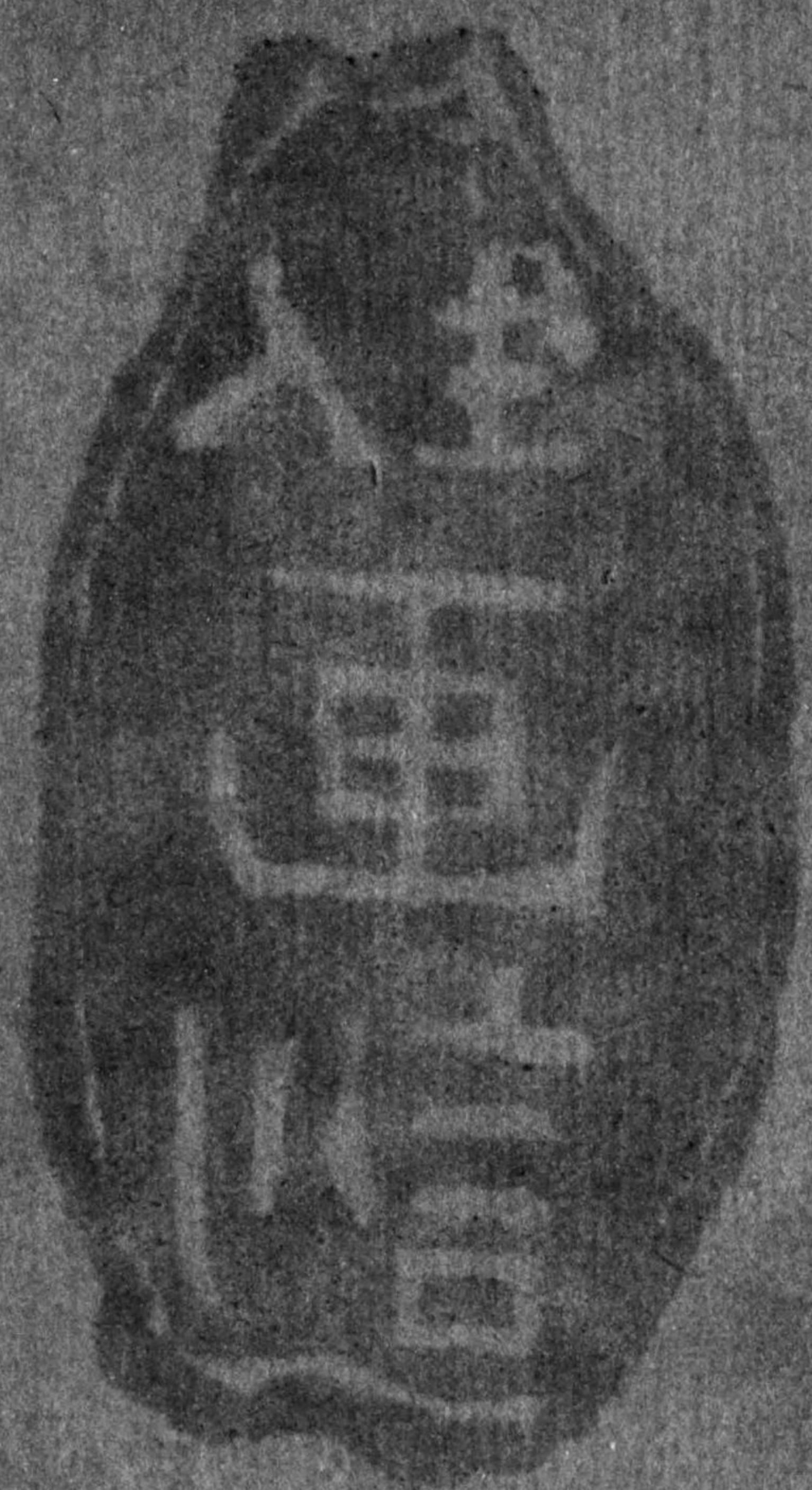
世の中がだんぐりに氣忙しくなつて來て、ごんな爲になる修養
 辭でも、服膺すべき警句でも、文字では中々讀んでくれない、
 そこで考へたは、縷々數千言に勝る一筆の漫畫で以て、讀まず
 に目で見えて、趣味の裡に會得して貰ふべく、鳩甫畫伯を煩はし
 て出來上つたのは此畫訓である。

見る人、此中の一ツでも感得が出來て、それが實行の人と成ら
 るるを聞かば、編者が本懐やこれに過ぎざるものである。

本書は古江欄堂氏が幹せる雜誌乃木式を拔萃せる冊子心の灸よ
 り採つたものが多くある、識して出所を瞭にす。

大正十五年の初め

編者識



2
生人 書訓目次

◆この心持……………	一	◆自賞自詡……………	一九
◆向上向下の岐路……………	二	◆時に臨んで知る……………	三
◆其一つを重ねな……………	四	◆運命はあべこべ……………	三
◆尊い汗と安い汗……………	七	◆都合の程度……………	六
◆現代人の病症と豫後……………	八	◆心の受け方……………	三
◆裏切する味方……………	三	◆人生兩極致……………	三
◆自己の省察……………	一五	◆喜ぶべき抵抗……………	三八
◆衆愚の餘興……………	一六	◆樂と甘言……………	四〇
		◆望 蜀……………	四二
		◆食に媚びず……………	四三

◆本分を誤るな……………	四	◆向上の苦み……………	七
◆らしからざれ……………	五〇	◆好運の馬……………	七
◆たゞ働け……………	五三	◆他刀の利用……………	七
◆人獸比較……………	五四	◆使へ、使へ……………	八〇
◆修 行……………	五六	◆同情の押賣……………	八三
◆幸福は副産物……………	五九	◆二つの解釋……………	八六
◆難 題……………	六三	◆らしかれ……………	八八
◆社會の一員……………	六五	◆大人物、小人物……………	九一
◆笑ひを學べ……………	六六	◆たゞ喜べ……………	九四
◆過てる希望……………	六九	◆危い哉此母……………	九七

- ◆權利と責任……………一九
- ◆法にふれぬ横領……………一〇一
- ◆西洋と較べて……………一〇三
- ◆綱紀亂れて……………一〇五
- ◆招かずして到る……………一〇六
- ◆音の反響……………一一二
- ◆用語の變遷……………一二三
- ◆此腕一つが……………一二四
- ◆嫌はれ人……………一二六
- ◆ねばならぬ……………一二〇
- ◆自己創造……………一三三
- ◆障害物競走……………一三四
- ◆實行……………一三六
- ◆危険主義……………一三八
- ◆瞬間の一步……………一三〇
- ◆女性と男性……………一三三
- ◆天の試練……………一三六
- ◆繕はんが爲に……………一三三
- ◆相妬む……………一三五
- ◆唯一の味方……………一三六

- ◆相反性……………一四九
- ◆價値の平均……………一五〇
- ◆人と共に……………一五三
- ◆寛容……………一五四
- ◆同情ある觀察……………一五七
- ◆束縛……………一五九
- ◆歡樂の下向……………一六〇
- ◆拜外宗國民……………一六三
- ◆己れ以外の意思……………一六四
- ◆して可なり……………一六七
- ◆土俵と舞臺……………一六六
- ◆もう一息……………一七〇
- ◆今日一日を……………一七三
- ◆己より大なる教なし……………一七六
- ◆切符を通して……………一七六
- ◆不如意……………一八〇
- ◆漸を追へ……………一八三
- ◆無慈悲の保護……………一八六
- ◆己を忘れよ……………一八八
- ◆不善の同情……………一九〇
- ◆これだけの傳記……………一九三

持心のこ

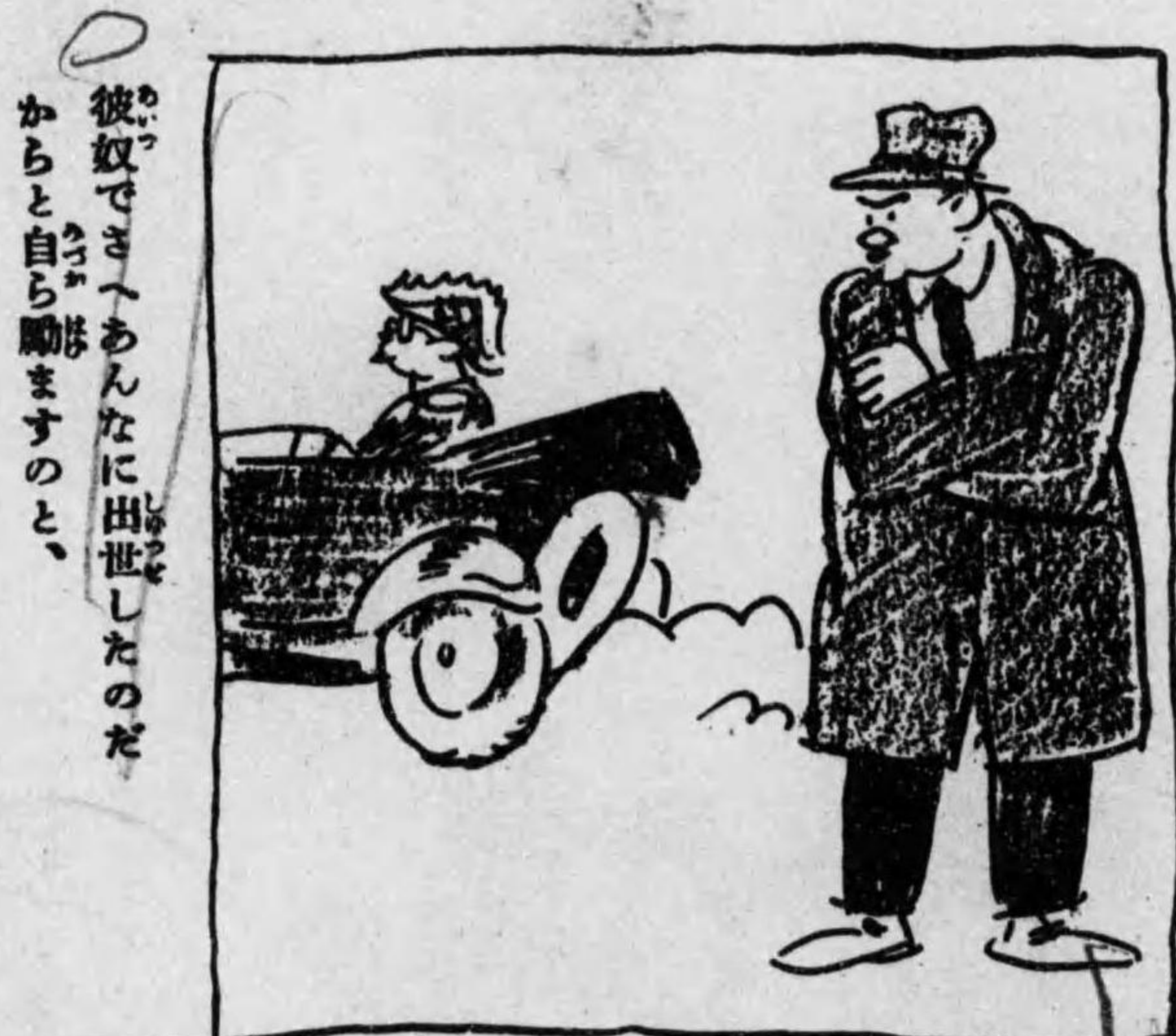


日常の執務にも此心持を忘れざる
 ことに依つて、修養と努力が数へられる。

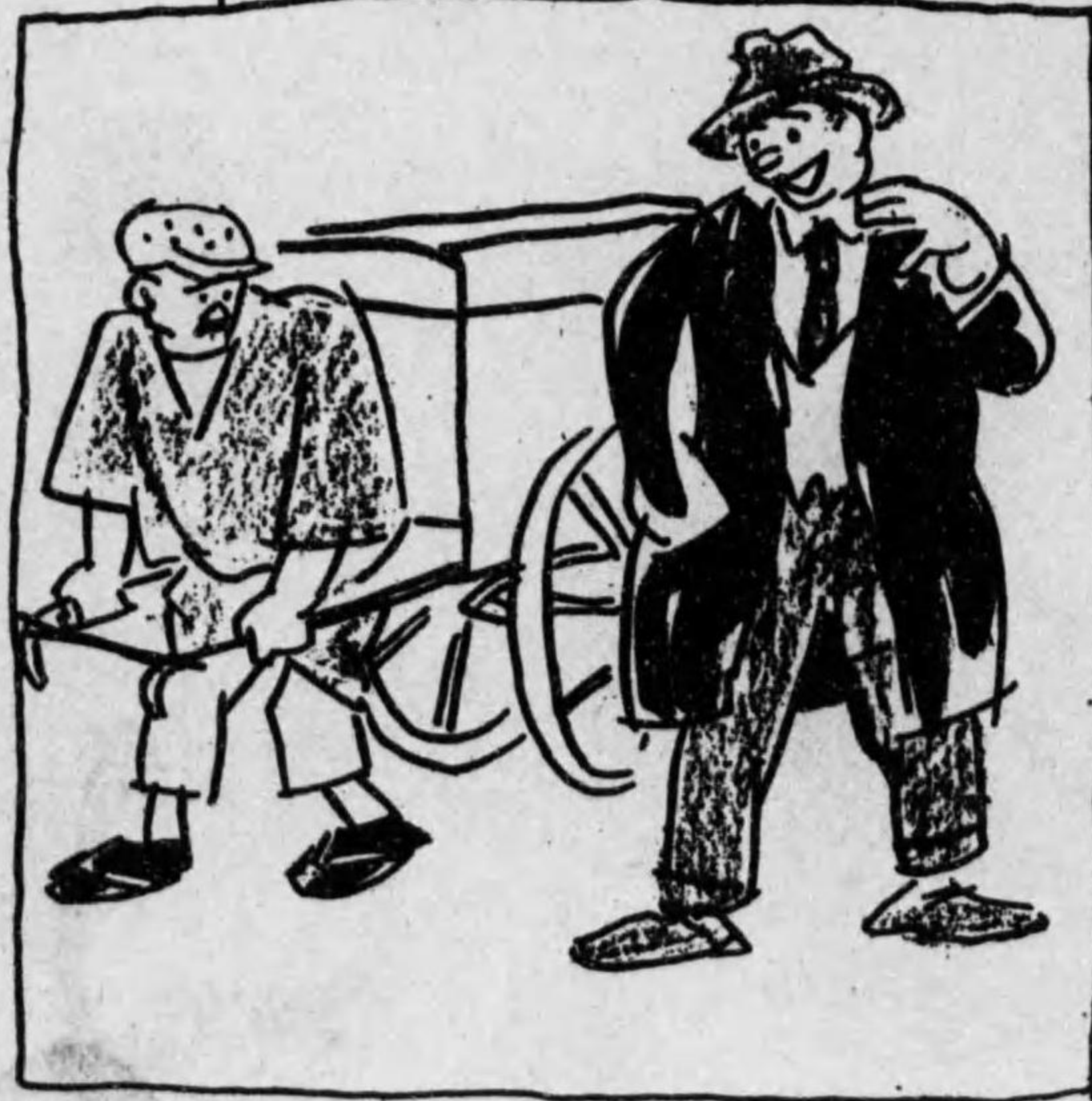
我々が打ち荒蕪を
 何段かの人が取済
 ました顔で側で見
 て居られるのには
 恐縮せざるを得ぬ、

本書を御通讀下されての御感想や
 幸ひに其一片たりとも御實行を得
 られた事實を御面倒でも發行所宛
 てに御報告を願ひたく、押へ切れ
 の編者の喜びと共に何かの機會に
 表彰したいと思ひます。

(2) 路岐の下が向ら上り向ら



彼奴でさへあなたに出世したのだ
からと自ら勵ますのだ



彼奴でさへあなたな仕事をして居るんだと
自ら勵めるのが

(1) 路岐の下が向ら上り向ら



「オヤもう六時だ」と驚いて飛起るのと



「まだ六時から」
が、又寝直すと

(2) なね重きをツニ其



(1) なね重きをツニ其



その一ツの罪を隠さんが爲にニツを重ねる事をやめよ その一ツで済ませる事に依つて改善の機会を得ん、

汗^{あせ}い 安^{やす}こ 汗^{あせ}い 尊^{たつ}ま



(3) なね重^{なねお}を ツニ 其^{その}る



(2) 後で豫とさ症病の人の代に現



(1) 後で豫とさ症病の人の代に現



(4) 後「豫」に 症「病」の 人「代」現



(3) 後「豫」に 症「病」の 人「代」現



(1) 方々味々るす切裏



憂さをはらし
交りを親う
する心の味
方の天の美餘し
度を過ご
しては魂を失ふ
恐ろしい
裏切者と
なり、

湯水と浪費する
悪癖は不治の裏切者
となり、

投機に因つた勞せざる收入は嬉しい味方だが、

(2) 方々味々るす切裏



甘い舌に乗せられて居る
中は楽しい
味方だが、

校り粕となつてから願られた
踏臺は悔いて及ばぬ裏切り、

目先きは利くし人を
外らさぬ才能は人生
得難き味方だが、

我子に目
のない甘
い母親は目先き掛け替
へのない味方だが、

長じて獨り歩きの出来ぬヤクザ者
に仕立てる過る裏切者だ、

才を倚んで事を過り
失敗を重ねる才能の
裏切りだ、

察省の己自



眞面目に自己を省察せよ、其處に懺悔あり、後悔あり、煩悶あらん、而して慰藉あり、努力あり、改造あり、向上が閃めく、

(3) 方味みるす切裏



好男子と生れたのは羨ましい偉大の味方だが、

ト、身が持てぬ紙衣姿に因果を示す恐ろしい裏切り、

四知の誠めを外處に袖の下を重くするの生活上有難い味方だが

廻り来る制裁の裏切りは時の問題だ、

(2) 興^き餘^りの愚^{おろ}衆^{しゆ}



(1) 興^き餘^りの愚^{おろ}衆^{しゆ}



(1) 罰自賞自



自分の行ひを自分で客観反省して其行爲に對する善惡の判決を下すと共に自ら賞罰を加へるがよい、判決の重なるに隨ひ人格は向上せん、人の腹口を吹聴した事を省みては、

勘忍して虫を殺し果せた後では、

エライ、よく辛抱した

(3) 興餘の愚衆



衆を倚む談判に不徹底多く

鶴が喧嘩は

九鳥に鳴く一鶴の裂帛に及ばず

静思黙坐に依つて得る安心に如かざること遠し

鶴を固めた一人の折衝よく要を得

多人數に伴はれる信仰は

(3) 謝り自り賞り自り



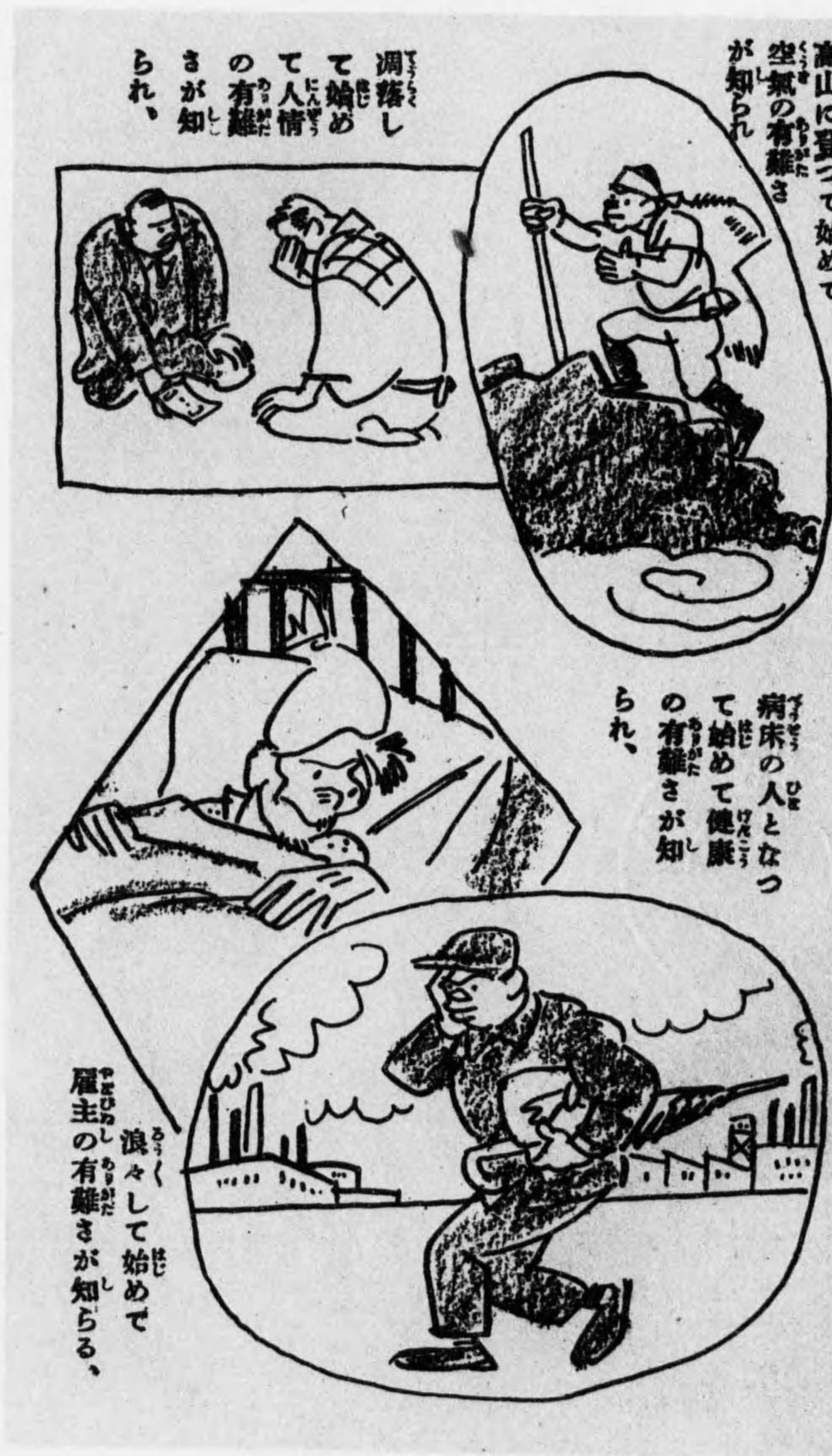
(2) 謝り自り賞り自り



(2) る知でん臨のに時



(1) る知でん臨のに時



(1) べこべあは命を運ぶ

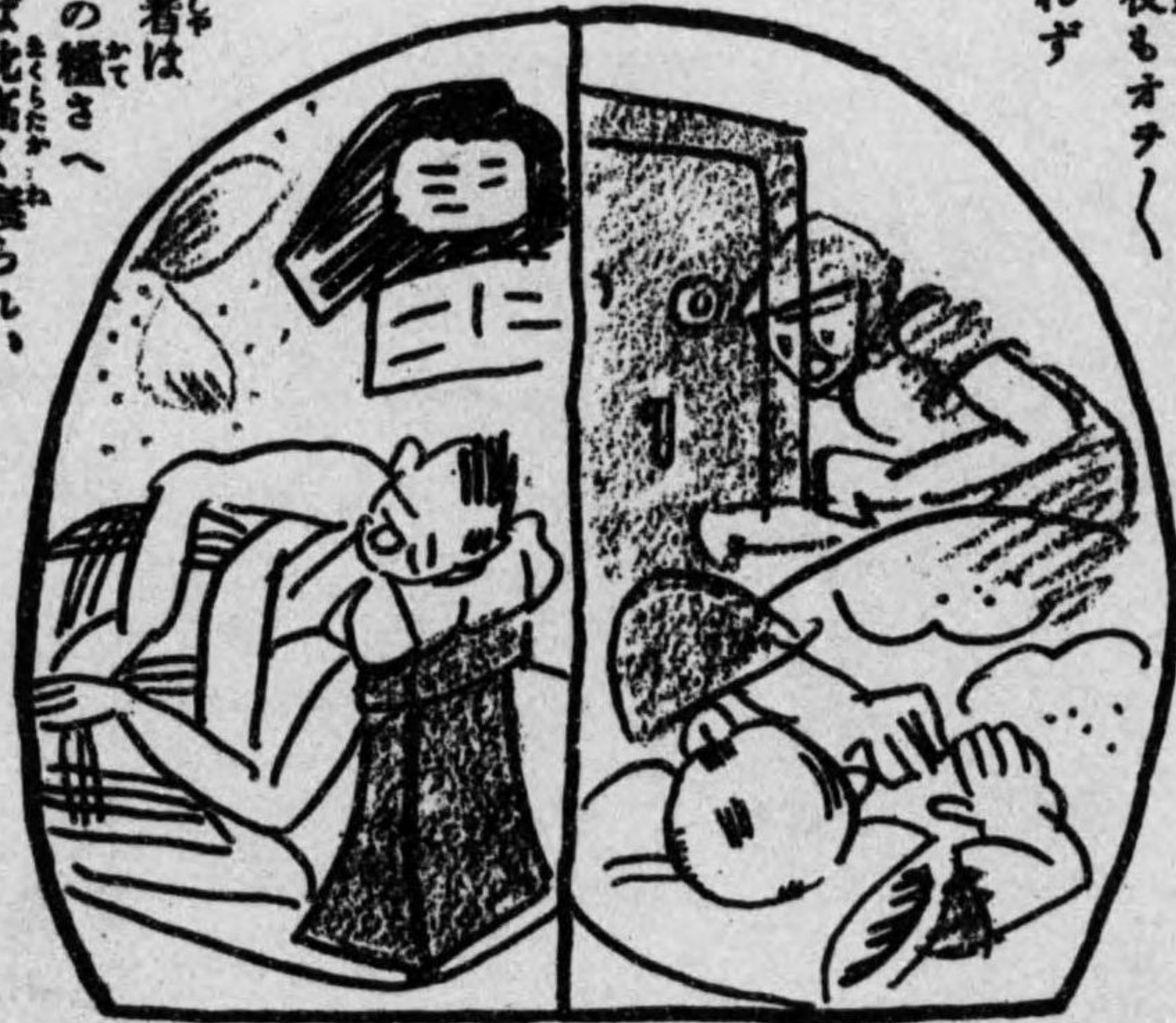


(3) る知りでん臨に時



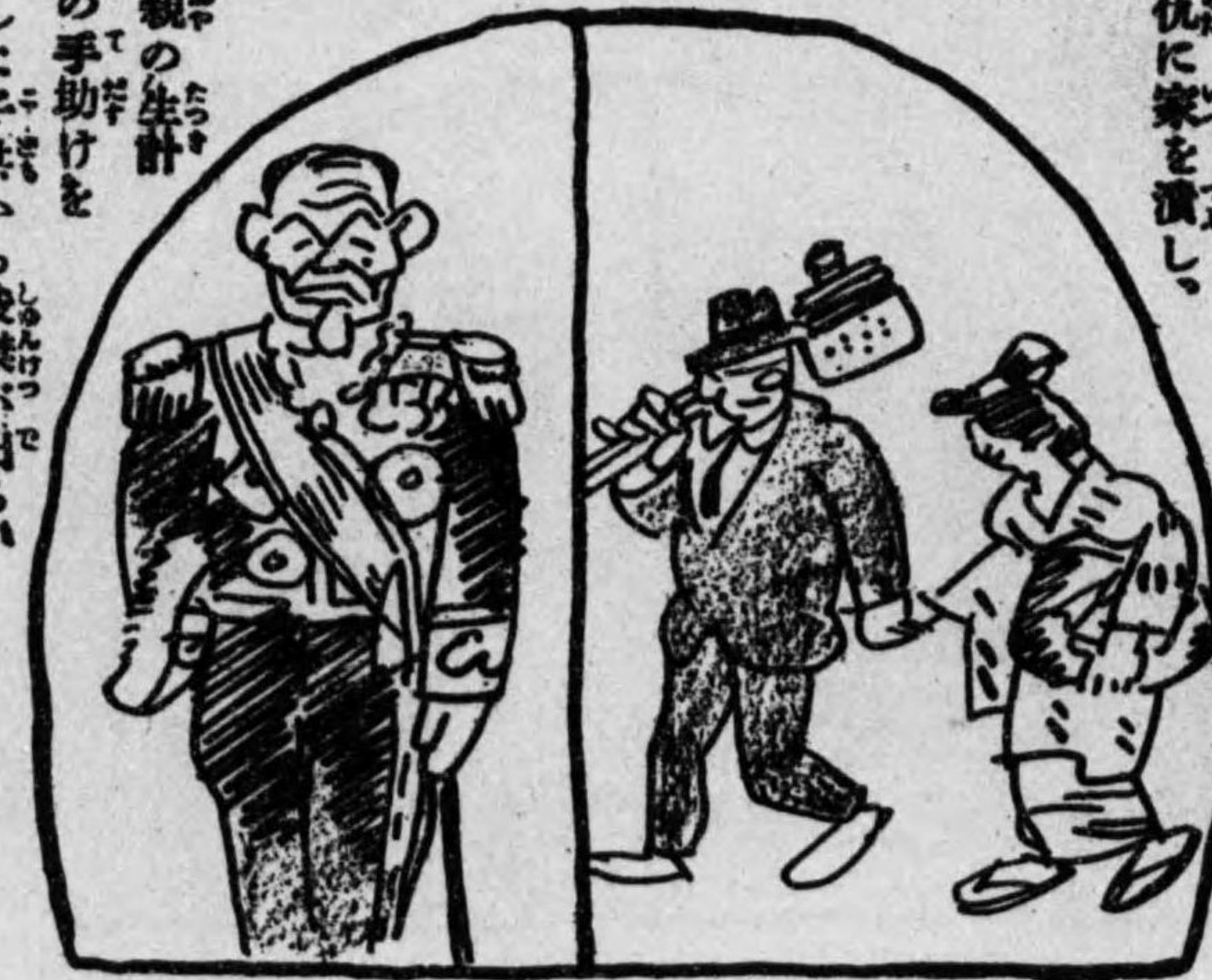
(3) べこべあは命運

無産者は
其日の糧さへ
得れば就高く寝られ、



金持は人を使ふ苦と、貯めた金の
爲に夜もオチ〜
寝られず

親の生計
の手助けを
した子供から後継が出る、



甘やかされて育てられた金持の子供は愚を
仇に家を潰し、

(2) べこべあは命運

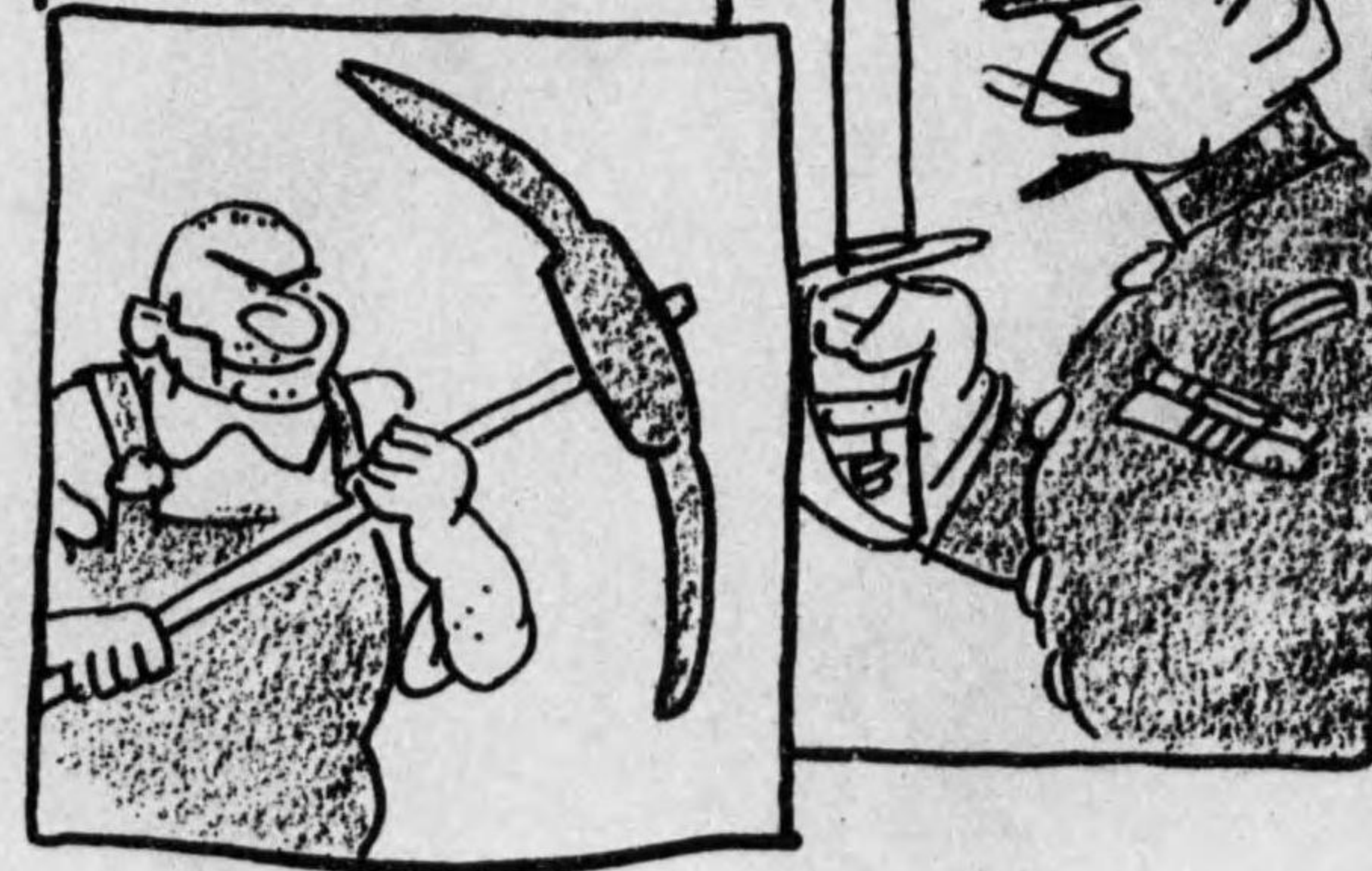
盟の水を無理に自分の
方へ引よせやうと
すると、



反對に水は
向ふの方へ
流れて出る、

聯合國は武力
を以て強敵獨
逸を屈伏させ
たが、

勤勉な
獨逸は
産業を
動んで
反對に
世界を
征服する、



(1) 度程の都合



(4) べこべあは命運



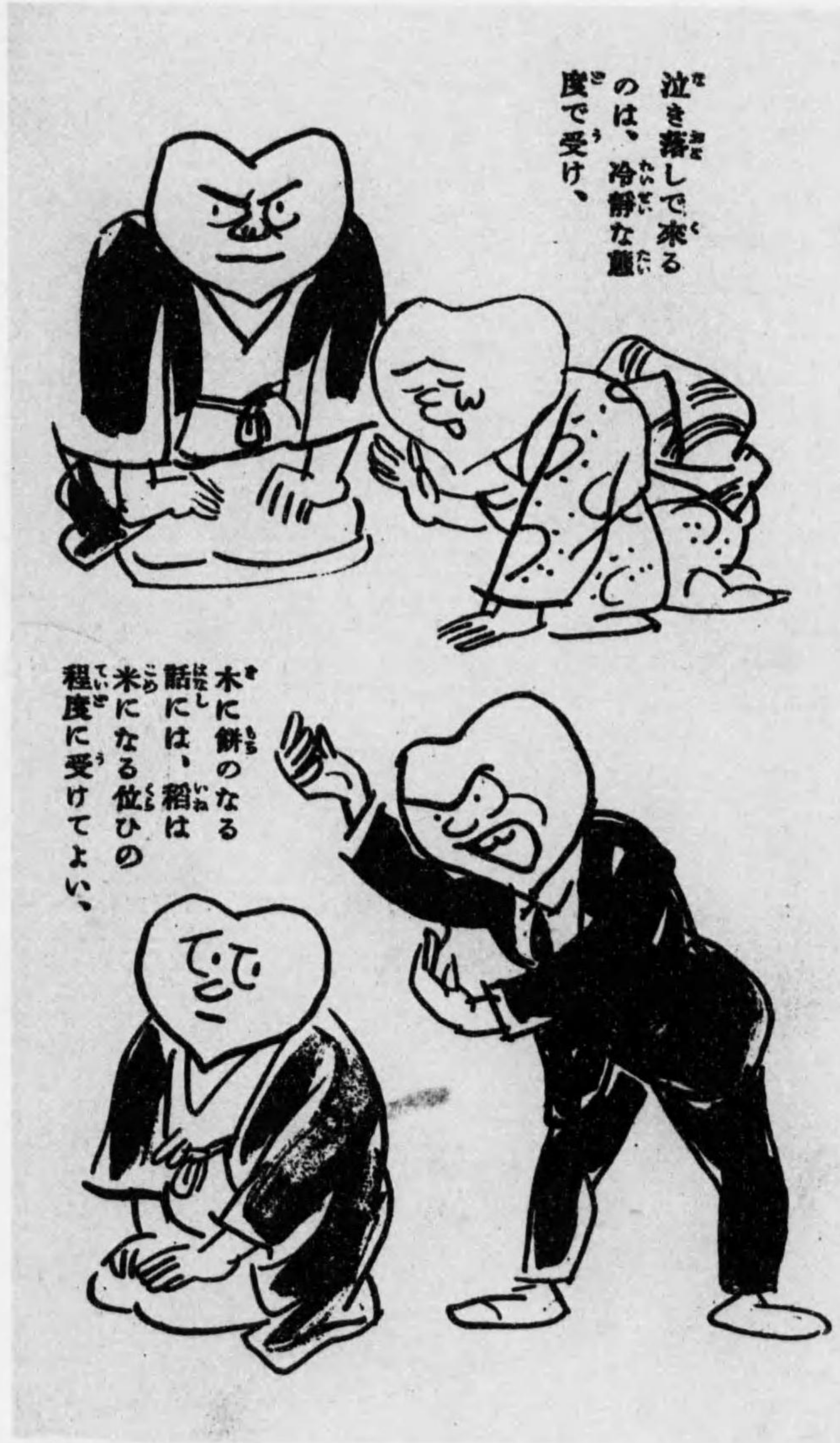
(3) 都合の程度



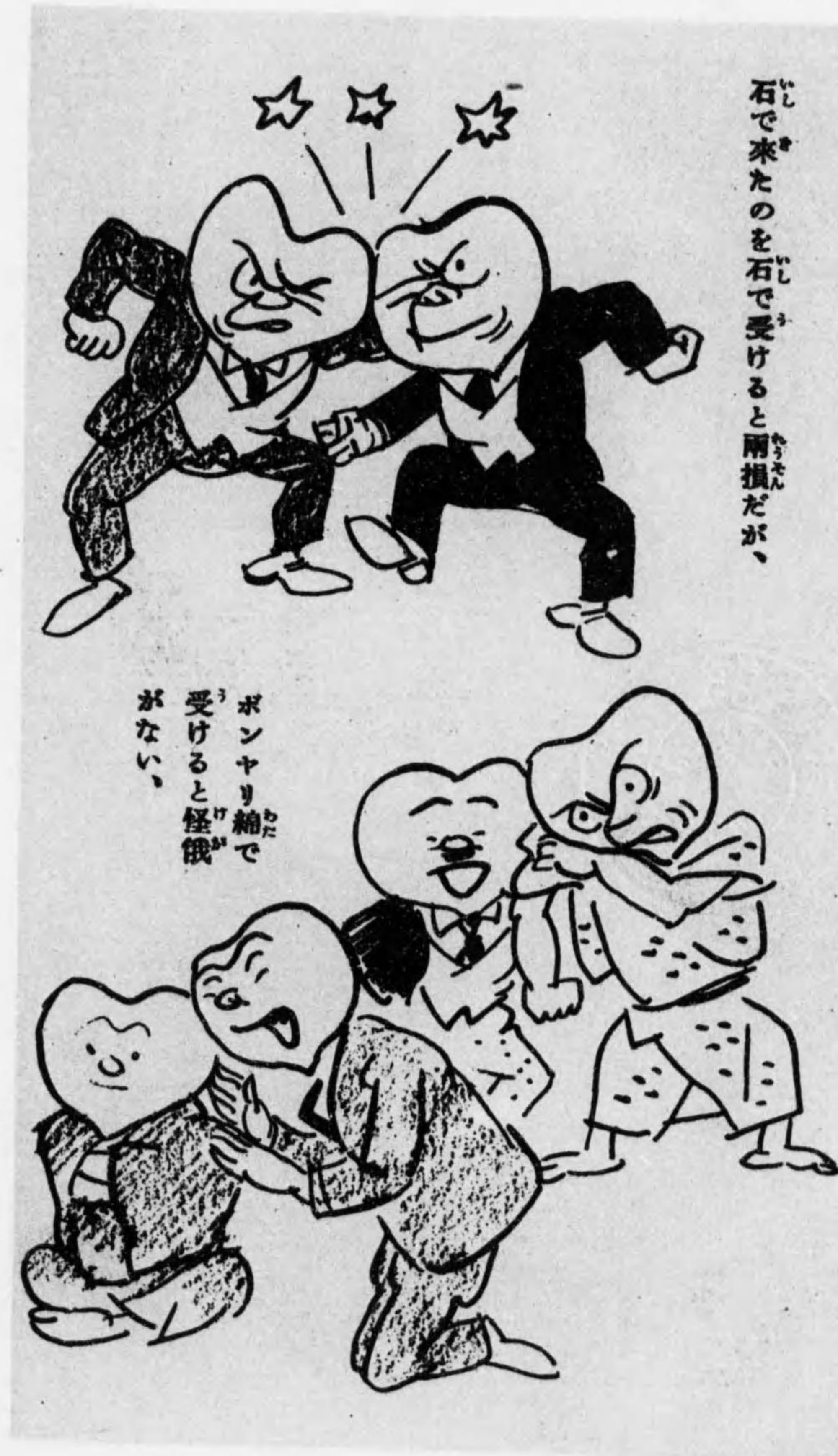
(2) 都合の程度



(2) 方^{かた}け受^うの心^{こころ}



(1) 方^{かた}け受^うの心^{こころ}



(2) 致極^き兩^りの 生^な人^に



我^{わが}事^じ業^{ぎやう}をイヤにする人^{ひと}は
福^{ふく}の神^{かみ}が厭^{いと}いな人^{ひと}で

事^じ業^{ぎやう}大^{だい}切^{せつ}と
喜^{よろこ}んでやる人^{ひと}
は貧^{ひん}乏^{ぼう}神^{かみ}を追^お
ひ出す人^{ひと}だ、

盛^{せい}装^{さう}させた女^{によ}房^{ぼう}をこれ見^みよがしに連^つれ歩^あく人^{ひと}は、

老^おひたる
父^{ちち}母^{はは}の同^{どう}
伴^{ばん}を取^とる
人^{ひと}だ

(1) 致極^き兩^りの 生^な人^に



江^え戸^どは水^{みづ}にさへ金^{かね}が掛^かる
と^との尻^{しつ}込^こみは卑^ひ怯^{けつ}なり

彼^{かれ}奴^{やつ}でさへ出^で来^きない事^{こと}を、己^{おのれ}に逆^{さか}もと思^{おも}へば
出^で来^きそうもない、

水^{みづ}でさへ金^{かね}になるとの考^{かんが}へで働^{はたら}けば成^{せい}功^{こう}する、

彼^{かれ}奴^{やつ}でさへ出^で来^きる
んだ、己^{おのれ}に出^で来^き
ない替^かはないと
思^{おも}へば何^{なに}事^{こと}でも
吃^く度^ど出^で来^きる、

(4) 致極兩の生人



(3) 致極兩の生人



(2) 抗_{てい}抵_{たい}き_き へ_へ 喜_き



楽_{らく}運_{うん}な_な主_{しゅ}命_{めい}に_に抗_{てい}する_{する}争_{そう}臣_{しん}も_もつて_{つて}家_{いへ}は_は盤_{ばん}石_{せき}だ_だが、

無_む抗_{てい}の_のない_{ない}事_{こと}買_か品_{ひん}は_は品_{ひん}質_{しつ}益_{えき}々_々下_{くだ}落_{らく}する_{する}ば_ばか_かり_りだ、

(1) 抗_{てい}抵_{たい}き_き へ_へ 喜_き



空_{そら}氣_きの_の抵_{てい}抗_{たい}が_があ_あつて_{つて}鳥_{とり}の_の翼_{つばさ}が_が強_{つよ}く、

朝_{あさひ}日_ひが_があ_あつて_{つて}毎_{まい}日_{にち}が_が向_{むか}上_{あが}する、

(2) 言甘と薬



(1) 言甘と薬



(1) 蜀望



人生階を得たるものは蜀を望み、階を得ざるものは階を望む、
 慾に弄ばれて常に己の影を追ひつゝあるのである。
 職に離れて危く路頭に迷はんとして漸くに履はれ口を得た彼は、
 や、生活の安定を得る事に依つて現在に安んぜず、
 より以上の蜀を得ん事を要求す、

(2) 蜀望



浮き川竹の辛い勤めから救はれた彼は、

見越しの松の主人公となつて望みが満ち、

今一紙の進位を強請んでグリ〜を極め込む、

すび婿に食^く



檻中の獅子食に媚びず、



親子兄弟これが爲に命を賭けて争ふ



人間の藝妓は金の爲には裸踊りも辭せず、

(3) 蜀^く 望^{ぼう}



事業や、緒に就いて多少の蓄財を見た彼は、



一割十倍百倍にもと、



危ふく深淵の岐路に立迷ふ、

(2) なる誤を分本



(1) なる誤を分本



(4) なるま誤りを分る本

財産は自
己の衣食を
償ふ爲で人を
羨ます爲ではない、



人の話を聞く爲に二ツの耳を付けられ
少なく話す爲に一ツの口
を付けらる、

(8) なるま誤りを分る本

拳銃は自己を衛るが爲で
人を傷ける爲ではない、



衣類は寒暑を凌ぐ爲で人に見せ
びらかす爲でない、



(2) れざらかしら



(1) れざらかしら



なふ思きを日明

運命や幸福や
明日の事は
一切神に任せて
只今日を懸命に
働くに限る。



この秋は水か嵐か知らねども今日の勤に田草取るなり

二ノミ 田草取る

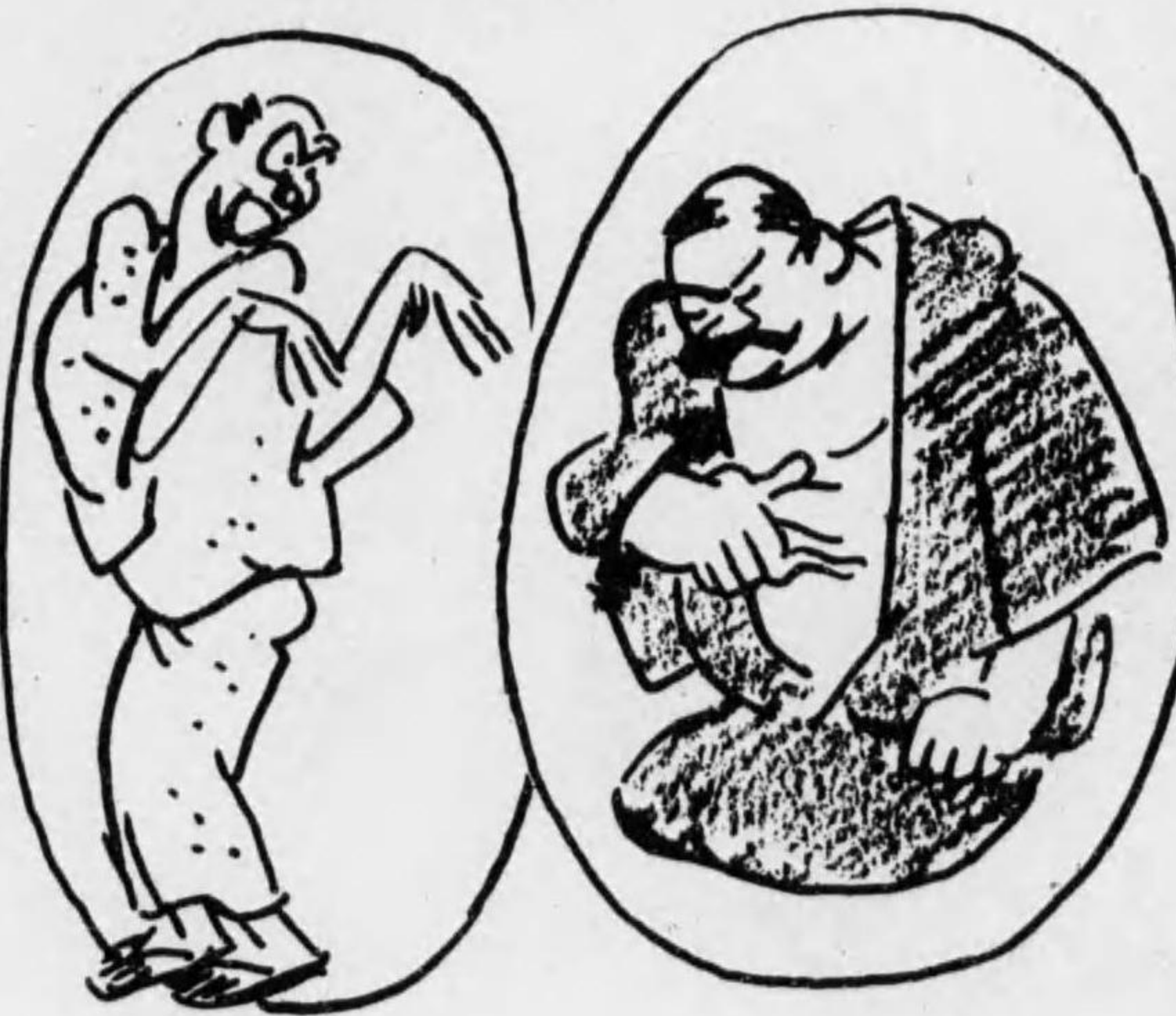
(3) れざらかしら

識者は口を閉ぢて人の
口に耳を傾け、



愚者は耳を閉ぢて
口角泡を飛ばす、

大人は事の蹉跌に己を責めて人を責めず、



小人は己を責めずして人を責む、

(2) 較比の獸人



(1) 較比の獸人



(2) 行修



(1) 行修



人生を通じて何事か修行ならざる。この心持を忘れざることによって、品性の向上を見、金剛無缺の人となれるのである。

(1) 物が産み副産物は 福幸



(3) 行修



(3) 物産副産は福幸



金の爲に造る工藝品には
妙技は見へぬが、

愁を離れ
た技巧は
高く賣れる、

女に惚れられると直に自惚れる
のは厭かれるが、

惚れられても
知らぬ顔する
人は益々慕は
れる、

(2) 物産副産は福幸



商人が幸福を得んが爲に
大きな利益を得んとするには、

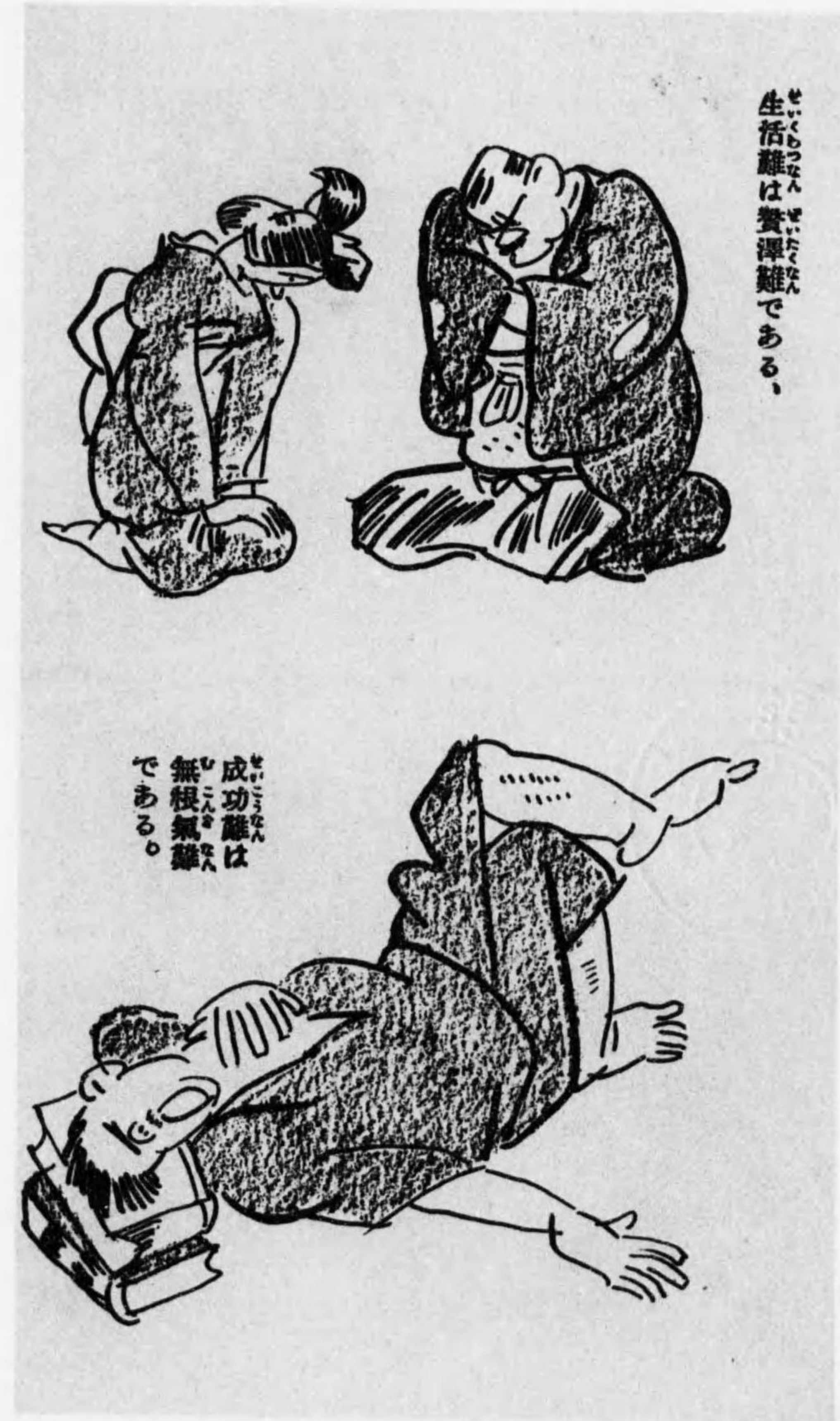
幸福その者が目的で商賣が従で
あるから失敗に陥する、

商賣を主とする自然に興味が出来て薄利に客を呼ぶ
主たる商賣の爲に副産物の幸福は自然に来る事となる

(2) 題に 難



(1) 題に 難



社員の一員

んな端役たりこも最後まで観客を前に舞臺に立つた覺悟を忘れてはならぬ。



思ひの好き放題を許せば
芝居は滅茶く、社會の秩
序は覆やされる、我々は

吵たる吾人の一小驅も社會組織の一員である、名優一座の、して我々はや、入らせませうの腰元である、馬の脚も無ければ芝居は出来ぬ、こんな風に、

(3) 題 難



粗忽難は性急難である、



孤獨難は偏見難である、

(2) べ學をひ笑



怒つて暮すも一生、

笑つて暮すも一生なら、

笑ふ人の奥行は測り難く、

開唇よく國を傾ける
笑の徳だ

(1) べ學をひ笑



笑顔に優る化粧はなく、

ニコボンは富妻那の
辯に勝る無言の雄辯だ、

笑顔には打つ杖はない、

(1) 望^{のぞ}希^をる^て過^か

商人は何んでも早く金を貯めて利息で食べるやうになつたら希望で算盤をはちき、



労働者は一日も早くこの労働より免れんとして労働し

親爺は早く息子に出世させて育ての恩を返させんことを思ひ、



(3) べ學^ををひ笑^を

一家の團笑は賑ひ寄せぬ音楽の聲だ、



(3) 望^{のぞ}希^{のぞ}る^るて過^あ



望^{のぞ}み^ま違^{ちが}げてヤレ
 くと思^{おも}ふ心^{こころ}に缺^{けつ}陥^{かん}
 が出来^{でき}て身^み心^{こころ}緩^{ゆる}み死^しの
 神^{かみ}は近^{ちか}づくものだ、
 希^{のぞ}望^{のぞ}な易^{やす}へよ、死^しぬまで
 働^{はたら}くものと、

(2) 望^{のぞ}希^{のぞ}る^るて過^あ



腰^{こし}辨^{べん}は恩^{おん}給^{たま}ひの到^き着^{やく}日^ひを指^さ折^ひり
 数^たへて毎^{まい}日^{にち}テク〜、

左^{ひだり}圍^い屬^{じやく}を當^あてに
 貴^き子^こを仕^し込^こむ
 悲^{かな}悲^{かな}なき母^{はは}は、
 銅^{どう}入^いれが待^{まち}速^{はや}
 しく、

到^{いた}る處^{ところ}で排^{はい}斥^{じやく}を
 食^く中^{ちゆう}が花^{はな}だ、

(2) み 苦 の 上 昇 向



(1) み 苦 の 上 昇 向



馬の運好



貴下に乗すべく背を見せた幸運の馬は何回となく貴下の目の前を通つて居る、併も徒に機を失して、先に
 騎り得た人を羨んで居る注意淺き人を、馬は嗤つてゐる、

(3) み苦の上向



(2) 用利の力他



(1) 用利の力他



(4) 用利の力他



(3) 用利の力他



(2) へ使へ使



(1) へ使へ使



(1) 賣_り押_しの情_け同_じ

あの孤_こ兒_じが長_{なが}々_々しい泣_{なみ}文_{ぶん}句_くを暗_{あん}誦_{じゆ}しなかつたなら
石_{いし}鹼_{げん}の一_{ひと}ツも賣_うれたらうに、



「父_{ちち}もなれば母_{はは}もなし、頼_{たの}む親_{おや}族_{しゆ}もない
身_みとて、天_{てん}涯_{がい}孤_こ獨_{どく}の憐_{あは}れさ_さに、同_{どう}情_{じやう}賜_{たま}ひて
一_{ひと}品_{ひん}の……」



遇_あふ人_{ひと}毎_{まい}に同_{どう}情_{じやう}の涙_{なみだ}を誘_{さそ}ふ人_{ひと}は
生_{せい}涯_{がい}人_{ひと}の袖_{そで}に纏_{まと}つて終_はる人_{ひと}だ、

(3) へ使_{つか}へ使_{つか}

耳_{みみ}は使_{つか}ふほど敏_{びん}感_{かん}に



指_{ゆび}は使_{つか}ふほどよく
働_{はたら}き、



心_{こゝろ}は使_{つか}ふほど鋭_{えい}敏_{びん}に



爪_{つめ}は磨_{みが}くほど
よく延_のびる、



(3) 賣、押の情、同



(2) 賣、押の情、同



(2) 釋のツニ

延引ならぬ用
件が突發した
んだらうと解
釋するのと、

約束を
違へた
友を待
たずに
腹を立
てるの
と、



未來を樂みに暫し木の葉の
下を潜つて居るんだと
解する被使用人と、

樂しみなくして
木の葉の下が潜
れるかいと解釋す
るのと、



(1) 釋のツニ

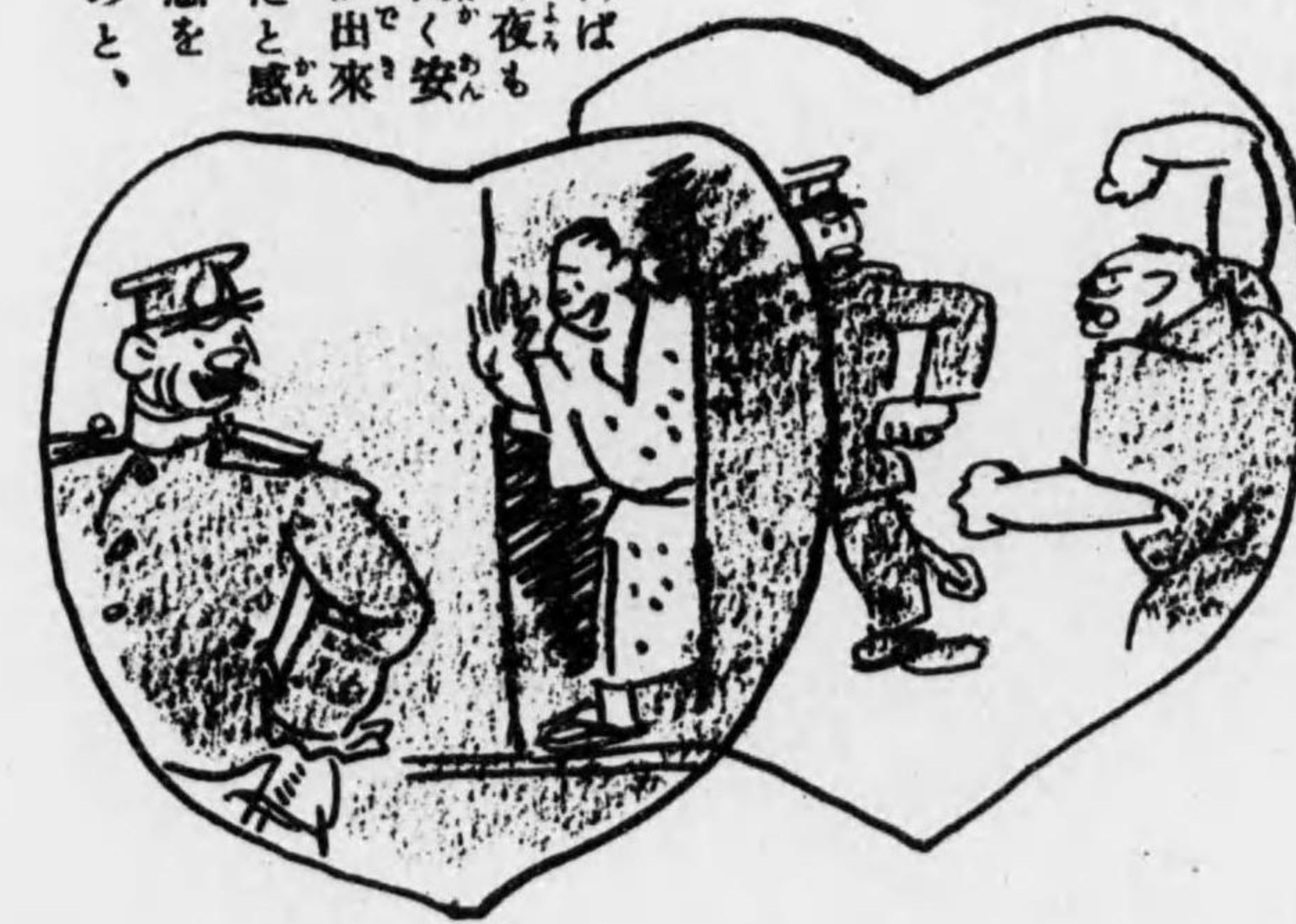
お前方が娛
樂の複産
物だ、兩
親が養育
する義務
は至當だ
と解釋す
るのと、

この人あつたれば
こそ生を人界に享
けられたものだ、
報恩は孝にありと
解釋するのと、



官權を層にイヤに
威張るボリス奴と
悪感を以て反
抗するのと

此人あれば
こそ夜も
枕高く安
眠が出来
るんだと感
謝の意を
表するのと、



(2) れかしら



(1) れかしら



(1) 物ぢ人ぢ小ぢ物ぢ人ぢ大ぢ

今の世は子供からが、犯せる罪を回避し
人に塗りつけて免れやうとし。



些細の事にも目に角立て、権利や義務を争ふのは
人を怒するの量なき所謂小人物の集合からだ。



(3) れかしら

子供の子供らしからぬは
早熟で通るが、

親爺の
親爺ら
しから
ぬは風上
にも置けぬ、



一家の圓滿を破る、
下女の下女
らしからぬは

奥様の奥様
らしからぬ
は頭に從
つて尾ま
で廻はる
が、



(3) 物ぢ人と小ぢ物ぢ人ぢ大ぢ



亂臣賊子の汚名を蒙りつゝ
 一言の申譯けもせず、
 未練たらしい世迷言
 も吐かず

怨むでもなく、悲しむでもなく、憤るでも
 なく、三州健兒の機性となつて、城山の露
 と消へた大西郷は、我等の尤も學ぶべく、
 敬慕すべき偉大の人物である、

(2) 物ぢ人と小ぢ物ぢ人ぢ大ぢ



事志しと違つては、掛替へのない命の安賣が
 流行となつて、薄志騎行者の行く道や一ツ、

好況時代には先立つて
 イ、面をした奴が、一
 朝の不況には先立つて
 免れやうと
 する頼む
 に甲斐なき
 小人物揃ひ

(2) べ喜^{よろこ}びた



(1) べ喜^{よろこ}びた



今日を喜び、今日を感謝する事に依つて、身心の充實が得られる、而して明日も、明後日も、斯くして運命の神は大きな手を擴げてそれらの人を引上げやうとして居る、

母は此の哉ない危



をのみ論ずるは迂である、
惜しい哉、今や美はしき固
有女性を破壊すべく、先を
争って彼女がハートを傷け
んとしつゝある、

日本兵士の強き所由、日本
男子の堅き志、忍耐強き
度胸は、日本女性の嚴しき
家庭の賜物であつた、
日本婦人を閉却して日本魂

(3) べ喜々た



人の親と
なれし事を、

五體の満足な事を、

世界に冠せる國體
の下に生を受け得
られた事を、

(2) 任責と利権



女を姪ましたら
其子供の處置を
承知せねばな
らぬ、

上長に抗するには其日からの
失職を承知せねばならぬ、



織るが如き
街上を疾走するには人を
轆く事を承知せねばならぬ、

(1) 任責と利権



人を殴つたら殴り返さるゝ事を承知
せねばならぬ、

自分の都合で人を
蹴るには其人の前途を見てやる義務を承知せねば
ならぬ、

愉快をしたら其償ひの
支拂を承知せねばならぬ、

領横ぢぬれ 觸かに 法



宏大な住宅を建て
が爲に多くの小住
宅を壊はして、
多数の人を立
退かしむる
のも其一ツ、

傍若無人に座席
を占有するもの
も其一ツ、

妻の外に第二第三
の外妾を蓄ふ
のも其一ツ、

我若し人の二人分を専有すれば、爲に縮められたる人は必ず苦痛を感じん

(3) 任責ミ 利權

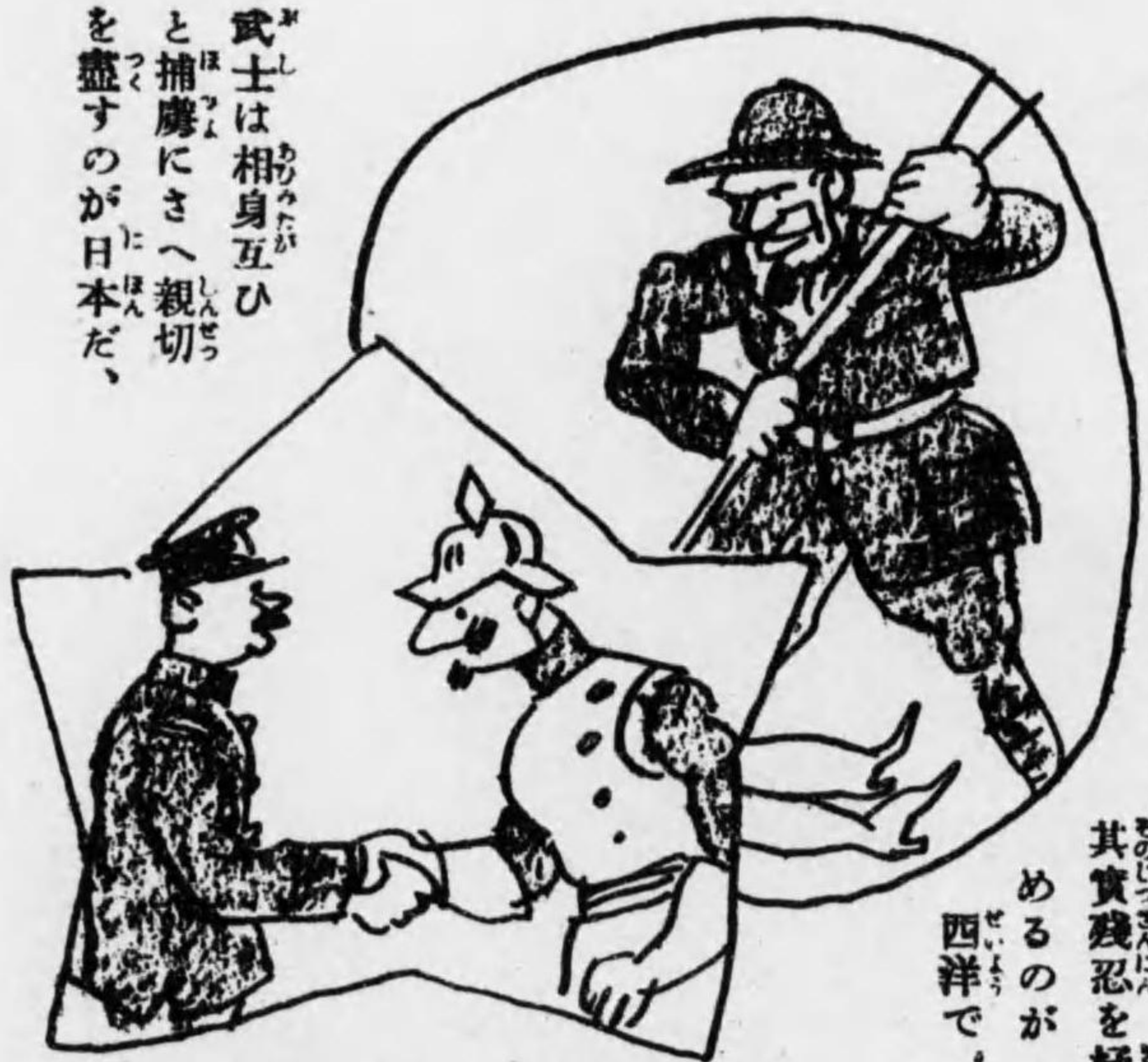


人を賤すには
恨みを買ふ責任を
承知せねばならぬ、

水を泳ぐには溺れる事を承知せねばならぬ、

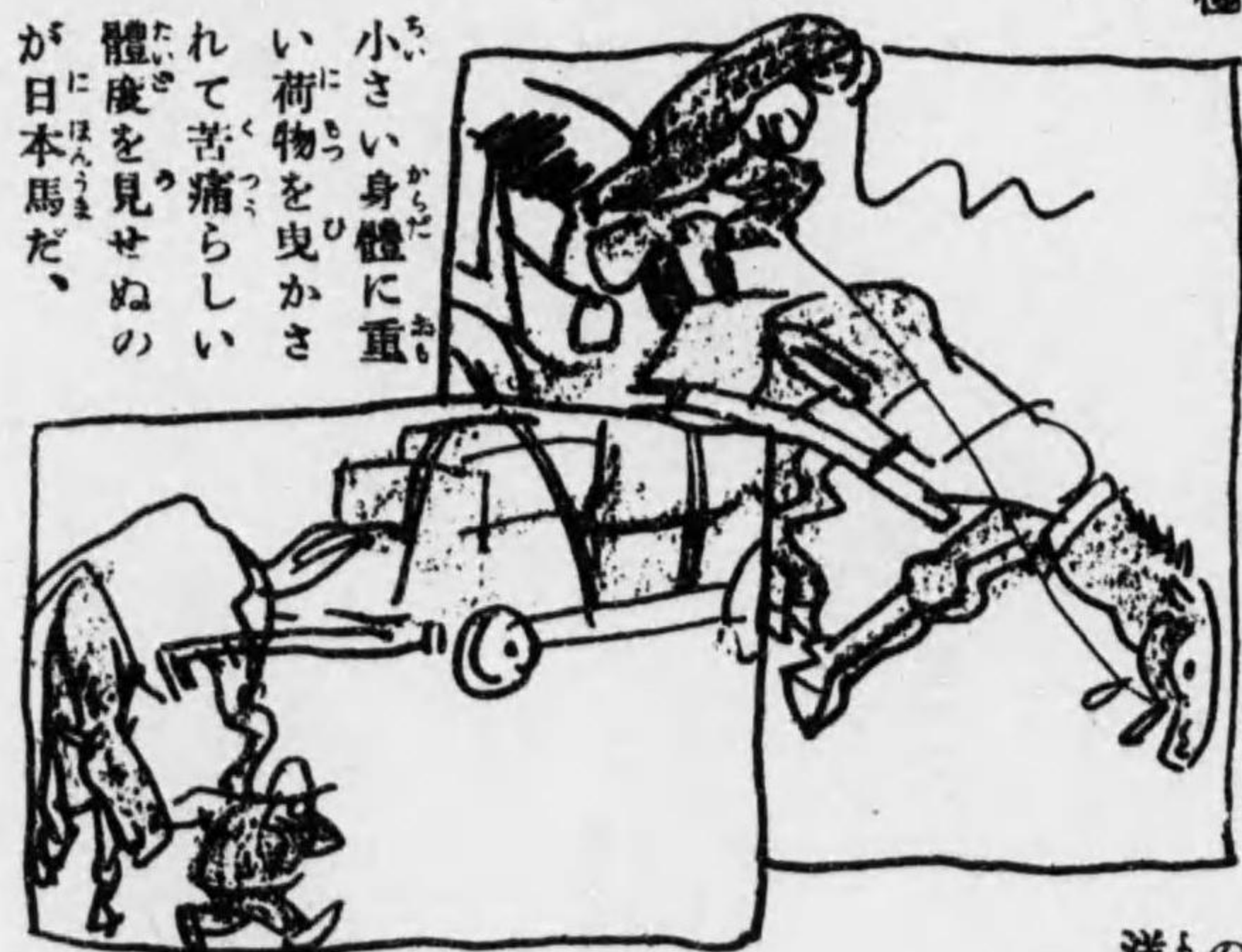
大きな利益を望むには
大きな損を覚悟せねば
ならぬ、

(2) てべ較に洋西



武士は相身互ひと捕虜にさへ親切を盡すのが日本だ、

敵を愛せよ、など心にも無いお世辭を口にし乍ら其の實殘忍を極めるのが西洋で、



小さい身體に重い荷物を曳かされて苦痛らしい體度を見せぬのが日本馬だ、

大きな圖體をし乍ら僅な荷物に氣息奄々たるのが西洋馬で

(1) てべ較に洋西



斷腸の思ひを奥齒に噛みしめて神色自若たるが日本だ、

喜怒哀樂を露骨に表情するが西洋で、

程度を超して女を奉るのが西洋で



無闇に女房を叱り飛ばすのが日本だ、

西洋と比較して、彼の長所は取るべきも特徴は與ぶべきでない、寧ろ學ぶべきの多くは彼にあるに非るか、

(1) てれ亂紀綱



銀行預金口で「汗水垂らした金を預けて
紙幣が暴落はせま
いか」

ポストの前で
「此手紙が無事に宛名
の人へ届くで
あらうか」

翻つて吾人にこんな杞憂が絶へざるものミすればさうであらうか、敢て國體を呪ふ非國民衆に誨ふ。

(3) てべ比と洋西



塵褥で大聲を上げて
泣きわめくのが
西洋婦人で

生死の境に
苦痛を忍
んで呻き
聲さへ洩さ
じとするのが
日本婦人だ、

六尺豊かな大男が炎天にコロコロ死ぬのが西洋で

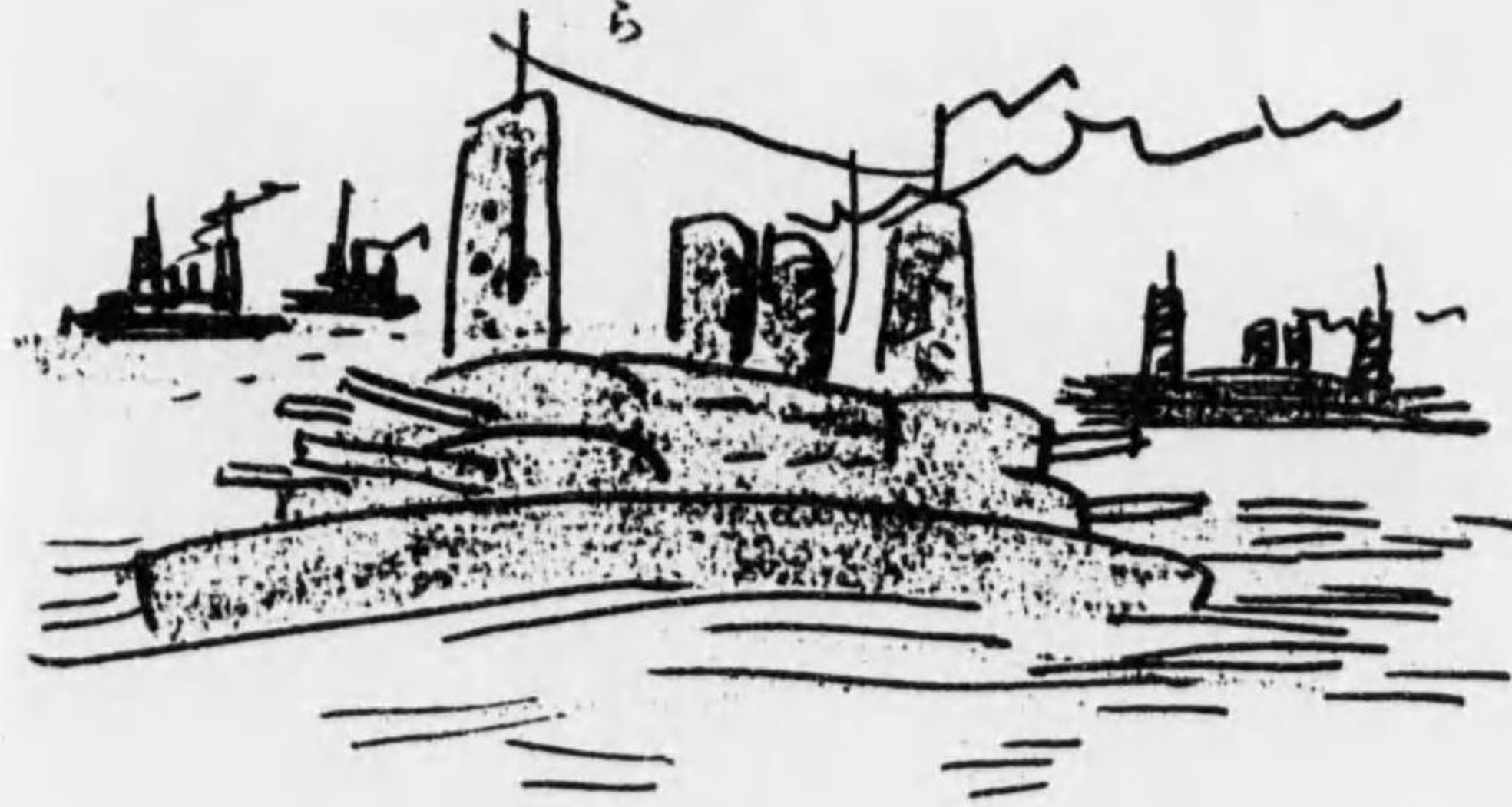
百度の酷暑
にも太陽直下に
慙々働くのが日本労働者だ、

(3) てれ 亂紀綱

金を懐にして
「ピストルを向け
られはせまいか」



他國の戦艦を見て
「戦つて亡國の民たら
ざるなきか」



(2) てれ 亂紀綱

足を延ばして「泥棒や
放火に襲はれはせまいか」

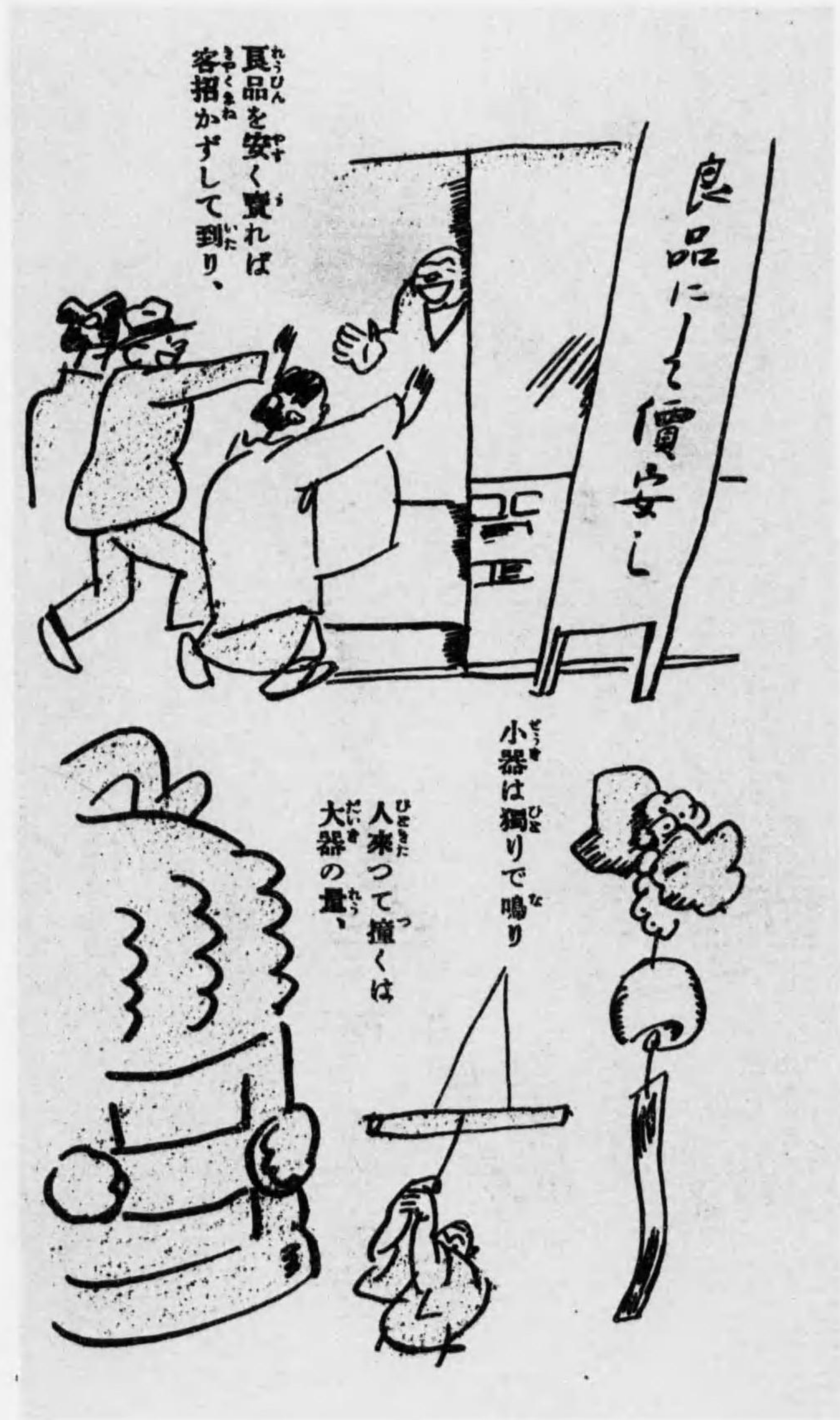


フラットに立ちて「汽車の行方に妨害が
ありはせまいか」

箸を取つて「毒なもの
を食はせはせまいか」



(2) 招かずに来てしる

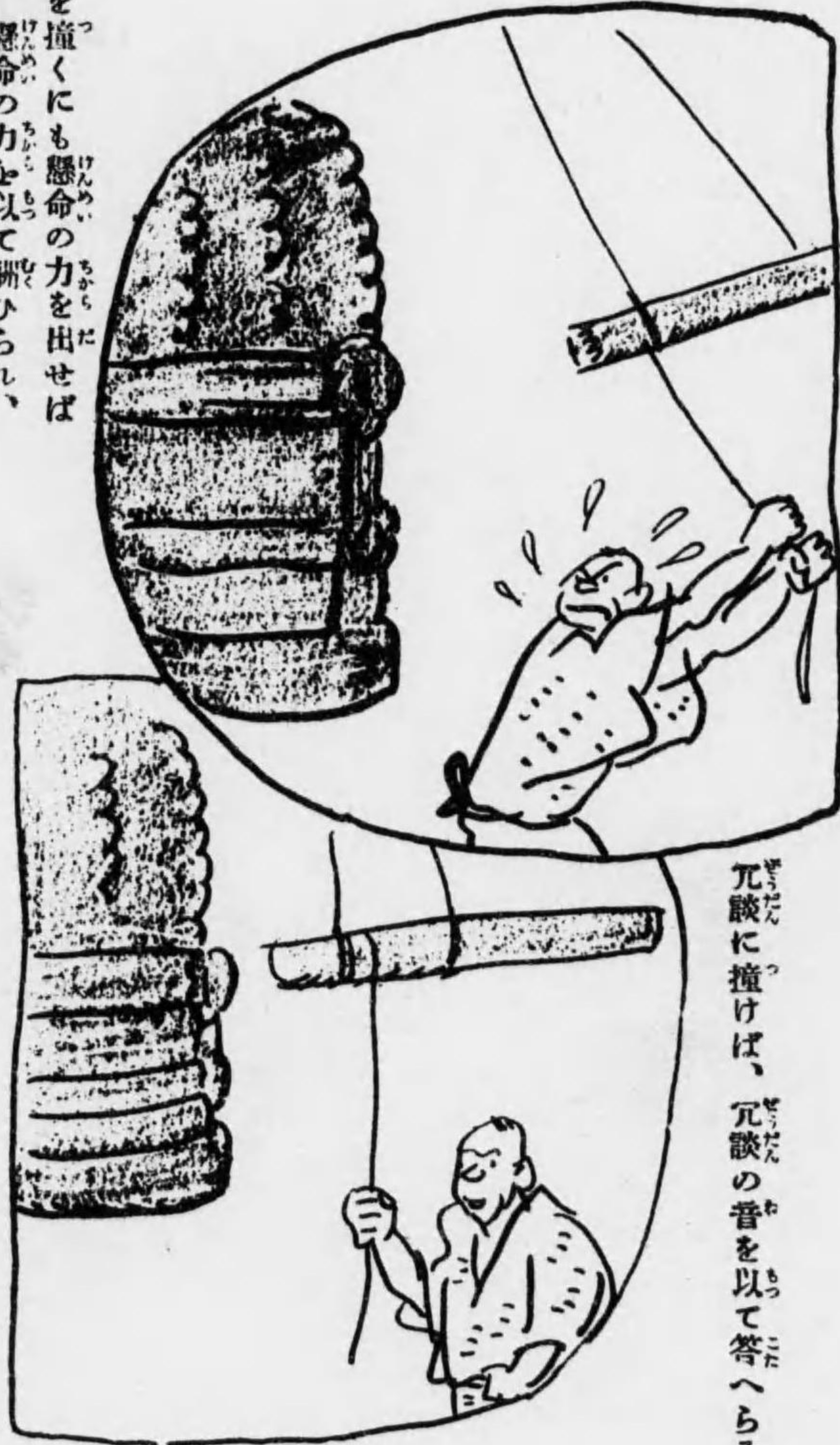


(1) 招かずに来てしる



響の反

鐘を撞くにも懸命の力を出せば
懸命の力を以て酬ひられ、



冗談に撞けば、冗談の音を以て答へらる、

(3) 招かすに到る

見てくれかしの盛装よりも、

素服の美人に人の目は寄り、



地位財産成
つては招か
ずとも人は
門前に蟻集
す、

天は避地に温泉や産物を興へて招かすして
人を寄せて人口の分布を均くする、

(2) 變遷の語



人妻を横
取つた森夫が、情人
となつて怪しまれず

親の膝元を飛
び出しては、
解放された女
性と稱へられ

事毎に警官に抗しては、民権の擁護者
として廣告されるのである。

(1) 變遷の語



忠君愛國を謂
つては囚はれ
たる舊人
と嗤はれ

夫を捨て、森夫に赴くを
純眞の愛に活き女と稱され、

異思想の宣
傳者を時代
の先覺者と
稱揚され、

金持が事業を始
めて成功すると
資本家の横暴と
毛嫌ひされ、

改悪された非道德の犯罪新聞用語に過まられた新らしき墮落者の多きことよ。

(2) が ツー 腕、此



(1) が ツー 腕、此



己ほど己に親切なものはない、頼めぬ人を頼むより、己は己に頼むのだ、

(2) 人々は嫌



(1) 人々は嫌



日本人が世界から嫌はれる原因が、

(4) 人ぞれは 慊

と云ふのが癢なら癢に觸らせておき、今に「斯の如く慊はれた日本人が今日の隆盛を成した所以であつたか」と、世界の歴史家を驚嘆させる計りだ、



○ 祖先を崇拝して

赤化しないで



戦争には強い、

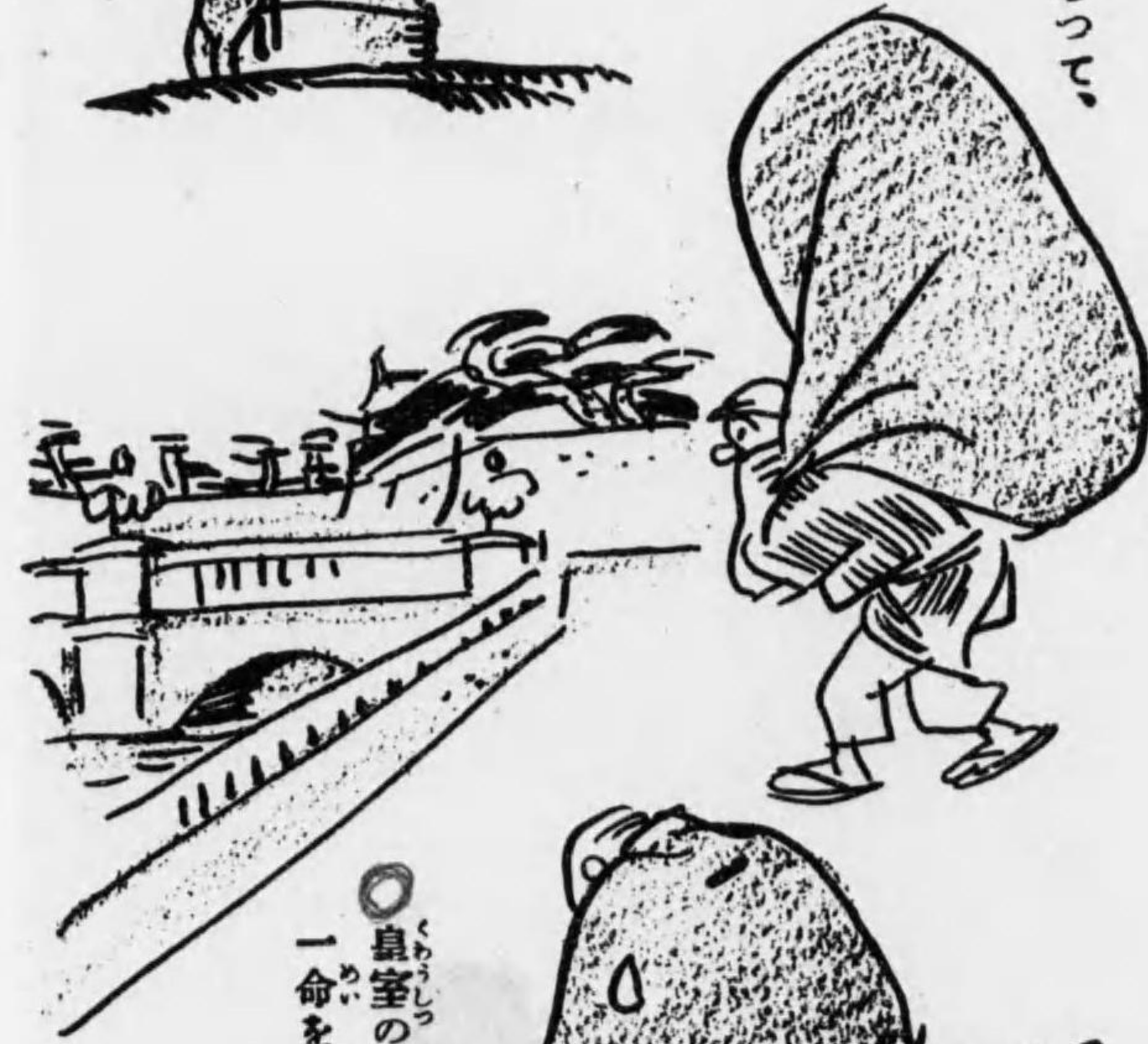
(3) 人ぞれは 慊



母國を忘れ得ないで、

貞操を守つて、

勤勉であつて、



○ 皇室の爲には一命を捧げて、

(2) ぬらなばね



人を殴るからには終世忘れぬ
恨みを買はねばならぬ、

規則を犯すには満座の中で顔から火を出す
事を想はねばならぬ、

(1) ぬらなばね



自己が個性の
發露を遂行
するには、

同時に他人の
個性を尊重せ
ねばならぬ、

自己の金力權力を示すには
伴ふ責任を果さ
ねばならぬ、

造_り創_造己_己自_己

始めは模倣であつて
學、工、商を通じて模倣や
修學の上を出て、自己創造を始め得ぬ人は
遂に水平線以下の人たることを免れぬ、



中程は學修

終りは自己創造で
あらねばならぬ、



(3) ぬらなばね

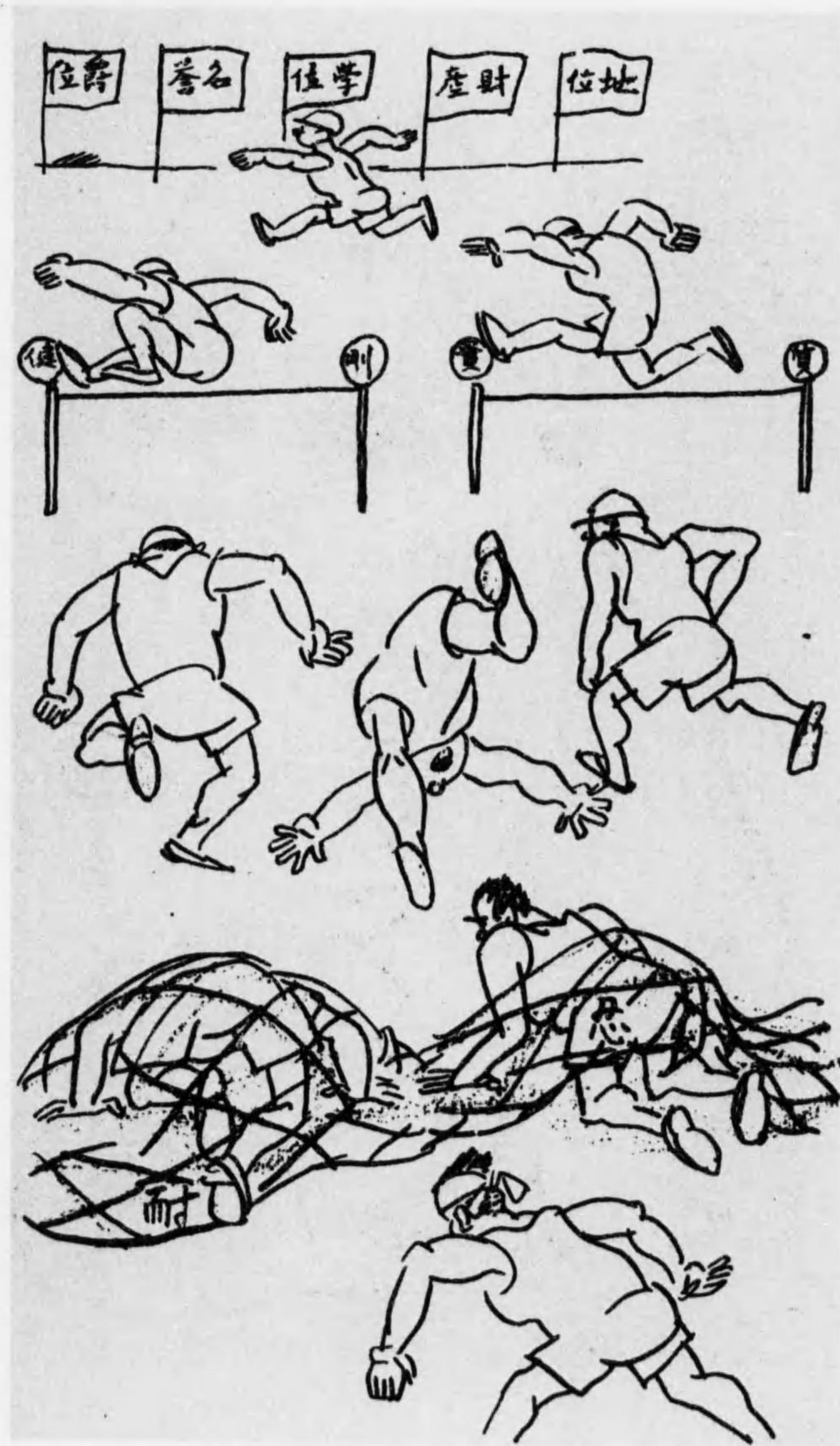
自己の權利を主張
するには同時に
それに對する
義務を心得ねば
ならぬ、



他人を排斥するには同時も己も
排斥される事を甘受せねばならぬ、



(2) 走競物害障



(1) 走競物害障

己がじつ好む旗を望むには
 あらゆる刻苦忍耐を撒き
 ねば得られぬ、
 徒らに安逸を願つて柳社
 丹を待つ人は
 空中樓を高く
 の空想に耽つ
 て生涯を終る
 の人である、



(2) 行_レ實_ル

三年の實行趣味を解し、



五年の實行習慣の人となり、



十年の實行實行の人となる、



(1) 行_レ實_ル

一日の實行難からず、



一月の實行困難な費へ、



一年の實行至難を感じ、



(2) 義主險危*



(1) 義主險危*



(2) 歩一の間瞬



手の早い奴に殴られて殴り返す迄に一步を退いて

考へる餘裕を拵へるのが
堂に入るの門で、

近い火を見てまづ用便をする度胸が
あつて過ちなし、

心急いで目の前を横切るよりも
先へやり過すのが「急がば待て」に適ふ

(1) 歩一の間瞬



敵と剣と交へるにも唯對手を突く、斬る、
刺さんと進むのみでは勝を得られぬ、
一步退いて始めて
敵の隙が見出される
のである、

己れ義理知らず奴がと、赫怒の刹那
逸る心を鎮め得るこそ修養の人、

女に口説かれて跳る心を押へ得て
オールライトを即答せぬ人こそ、
前途ある有爲の男子だ、

(2) 性男と性女



(1) 性男と性女



(4) 性男と性女



女の女らしからぬは
健氣に見へるが、



女は女性なり、
女らしからぬ



男の男らしからぬは
悲愴なり、



男は男性なり、

(3) 性男と性女



女の主位たると、



女は従の人なり、



男の従位たるは
共に悲愴なり、



男は主の人なり、

男女同権

(2) 練習の天



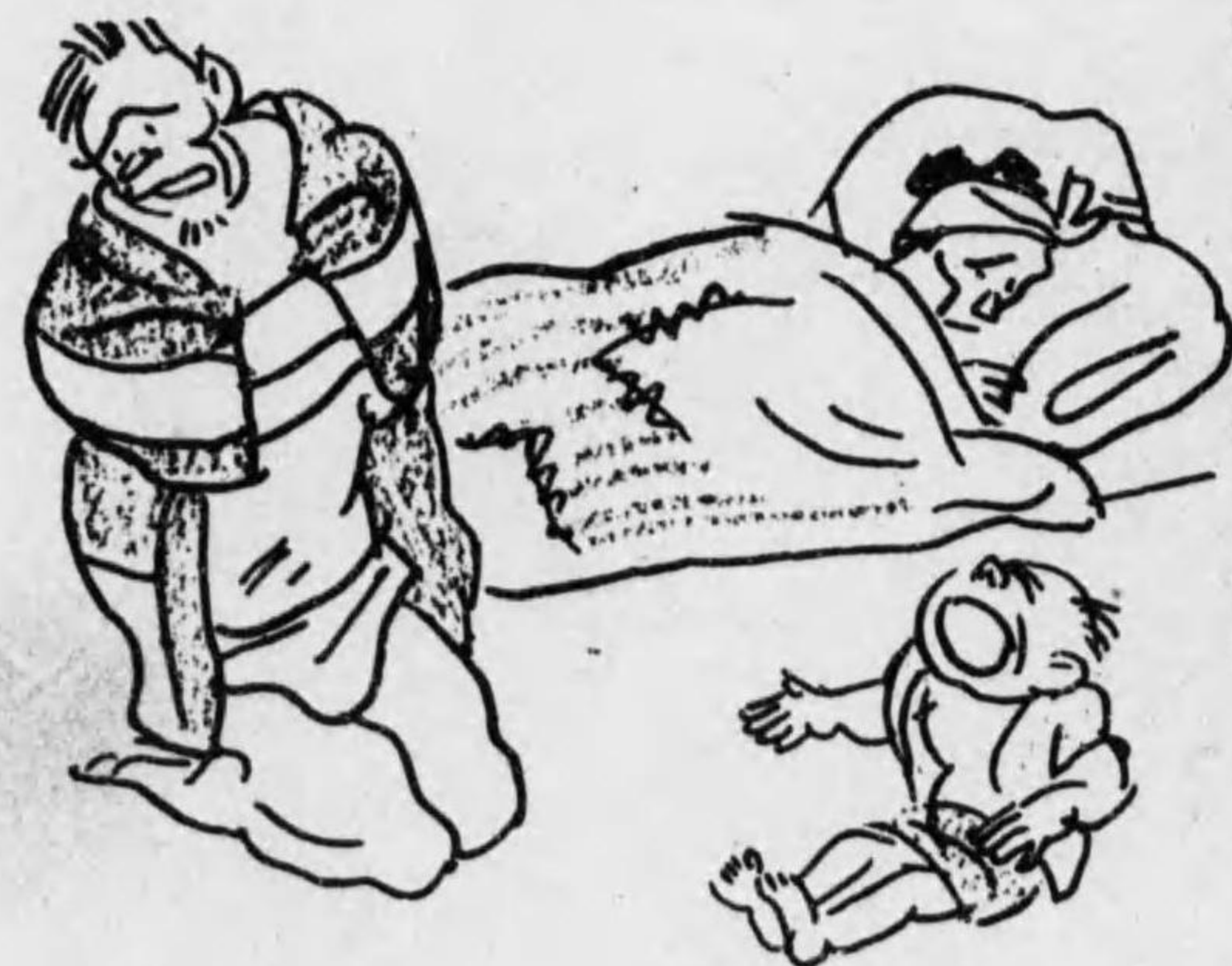
(1) 練習の天



(4) 天の試練



不意に枕元に大刀を
見せつけられて、狼狽
へて騒ぐか、落つ
いて見せるか、
度胸の試練



妻は病床に、兒は飢に泣く、貧乏神の
試練は、光明と廣道との岐路

(3) 天の試練



木の葉の下の
小僧奉公が、商賈
道に登龍し得るか、
否かの試練

時に暴風を起して船を危く
するのは船員の試練

順風に帆ばかりの順境に
馴れしめず、時に損害
を興へて覺醒せしむる
商賈の試練

(6) 練試の天



一難を突破してヤレ〜これで仕舞ひか
息つく向ふに又一山、もう〜逆も
と、ナニニ美ツとの緊張と難
どの心一ツが成功と否かの
大きな試験、

戦敗の獨逸國民が涙ぐましいばかりに
盡す粒々復興の汗や
立派な試験の及第者

(5) 練試の天



舞台で悪劇の横槍を入れられて
赫となるか、反省するか
技藝の試験

商賈に失敗して不義理の
後足砂を極るか赤誠
を吐露して盛返
しの後援を
させるか品性の試験

足元に落された大金入りの靴な
見せられる良心の試験

(2) に爲^なが んは 繕^{つくろ}



(1) に爲^なが んは 繕^{つくろ}



む 妬相恋



依頼心あるものは相妬む

宗教家は信徒の都合ひに没頭し

女性は装身を見較つて修羅を燃し

藝人は人氣の消長を氣にして互ひに仲間を盛し合はんとす

(8) に 爲るがんは 繕



一國一市の財政を論ずるの國士が

過失は過失として男らしく詫びればよいものを

家を顧みざるの罪は細君をしてアイヌに頭を下げさせる

それを繕うとすると相手を怒らす

(2) 方^{かた}味^{あじ}の - 唯^{ただ}



命^{いのち}から二番目^{にばんめ}と
頼^{たの}んだ金^{かね}でさへ
離^{はな}散^{さん}常^{じょう}な
らず、

老^おいては面^{めん}倒^{たう}を
見^みて黄^{わう}ふ積^{せき}り
あつた我^{わが}子^こにさ
へ邪^{じや}魔^ま扱^{あつか}ひにさ
れ、

(1) 方^{かた}味^{あじ}の - 唯^{ただ}



親^{おや}でさへ
眉^{まゆ}に火^ひの
付^つく急^{きふ}場^ば
には我^{わが}子^こ
を見^み捨^すて
る、

命^{いのち}子^こでもと契^{ちぎ}つた
戀^{こひ}女^{をんな}でさへ食^くはさ
ねば思^{おも}つてくれぬ、

骨^{こつ}肉^{にく}でさへ感^{かん}情^{じやう}の行^{ゆき}違^{ちが}ひ
から他^た人^{にん}以^い上^{じやう}の仲^{なつ}
ちがひとなり、

性^せ反^{はん}相^{さう}



(3) 方^{かた}味^{あじ}の唯一^{いちご}



(2) 均平の値價



醜婦は美人の
落魄を見て北叟笑み、



悪人は善人の秘密を探り得て喝采し、

(1) 均平の値價



劣等生は優等生の落伍を見て手を拍つて喜び、

貧乏人は金持の倒産を見て自己の貧乏を忘れ、

性の所有者である、

水平線以下の人間は如何にして自分の價値を向上せしめ能はする程に、他人の價値を傷害して底下せられたる他人の價値を自己を對比して、己の價値の向上を錯覺するの外はない憐むべき

人に共に



人を押し上げやうとすれば自分も共に推し上げる

人を引下げやうすれば自分も共に引下がる

(3) 平均の値



道行く人は自動車の顛覆を見て愉快を感じ

お隣りでは、貧しい眼の奴から侮辱的の排斥を食ふ國を見て胸をスカして居る、

(2) 容 寛



妻「貴郎があればこそ易々
ご飯も頂けるんだわ」

夫「お前があればこそどんな劇務も
勤まるんだ」



寛容に恥ぢて自ら責むるの時
到つて共に
向上が得られ、

侮辱に對する寛容
の重なるほどに、
益々人格に磨き
かけられる、

(1) 容 寛



人生斯くありたきものだ、
「君等が働いてくれればこそ、我等は
座して利潤が得ら
れるのだ」

勞「ナニニ貴方
がたがあればこそ
自分達は生活の安定
か得られる譯です」



「職務とは云ひ乍ら御苦勞な事で」

「人民があればこそ
職務があるわけだ」

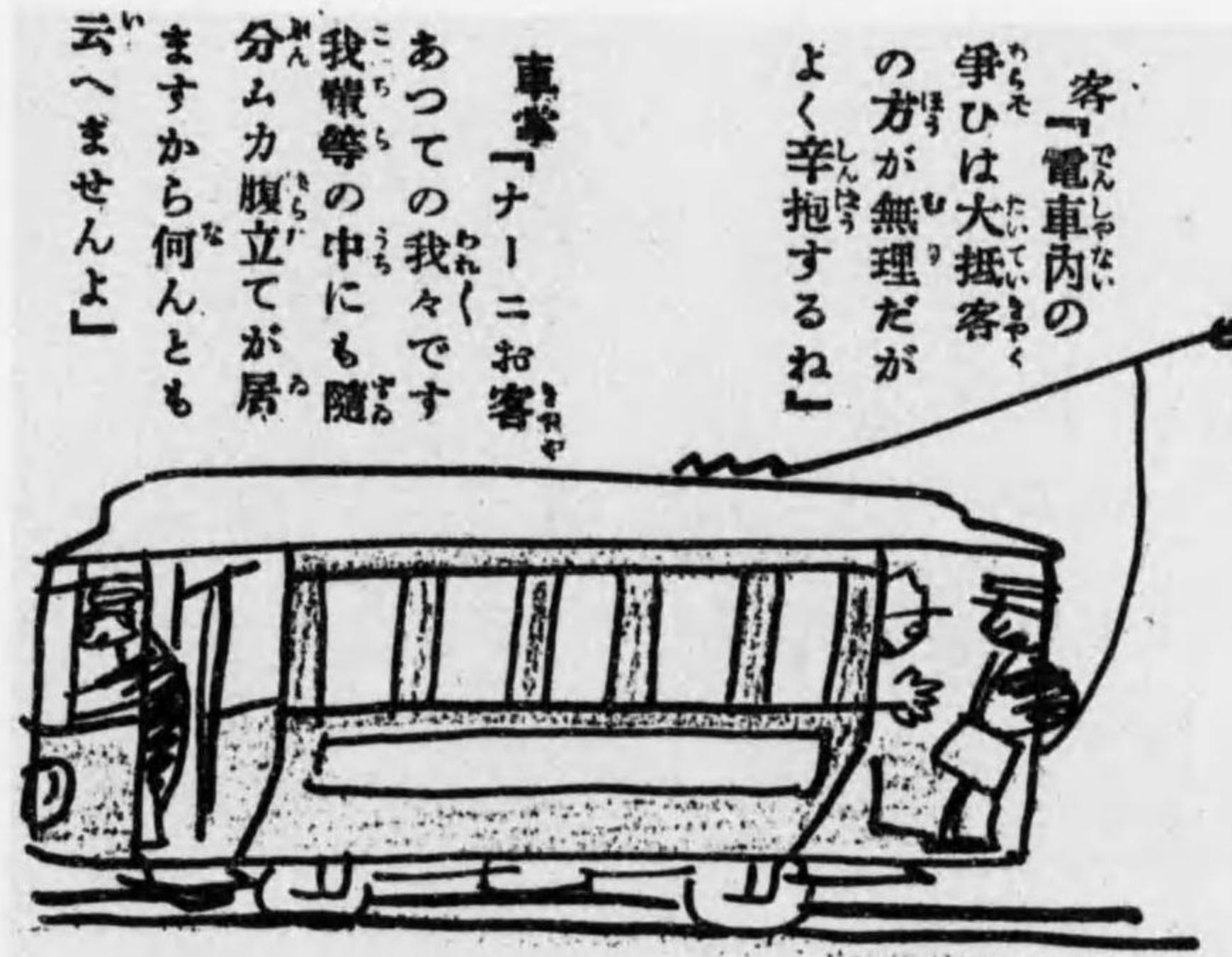
察観るの情同



美風を纏ふものに對しては
内容の貧弱を隠蔽せんとす
る憐むべき扮装者と觀察し

鏡舌者に對しては淺い奥行を舌に藉つて廣く
見せたい憐むべき雄辯者と觀察してやる。

(3) 容寛



客「電車内の
争ひは大抵客
の方が無理だが
よく辛抱するね」

車掌「ナニお客様
あつての我々です
我輩等の中にも随
分ムカ腹立てが居
ますから何んとも
云へませんよ」



憎い鳥に興へら
れた餌を

食つた鷹はいつか
餌主を慕ふ時代が来る

(2) 縛き 束き



丁年ていねんを過ぎては法律ほりうの手に



家を成いへしては妻子さいしの手に

獨立どくりつしては稼業かせぎの手に



産えんを成なしては社會しやかいの制裁せいさいに

(1) 縛き 束き

兒童じやうごとなつては父ちちの手に

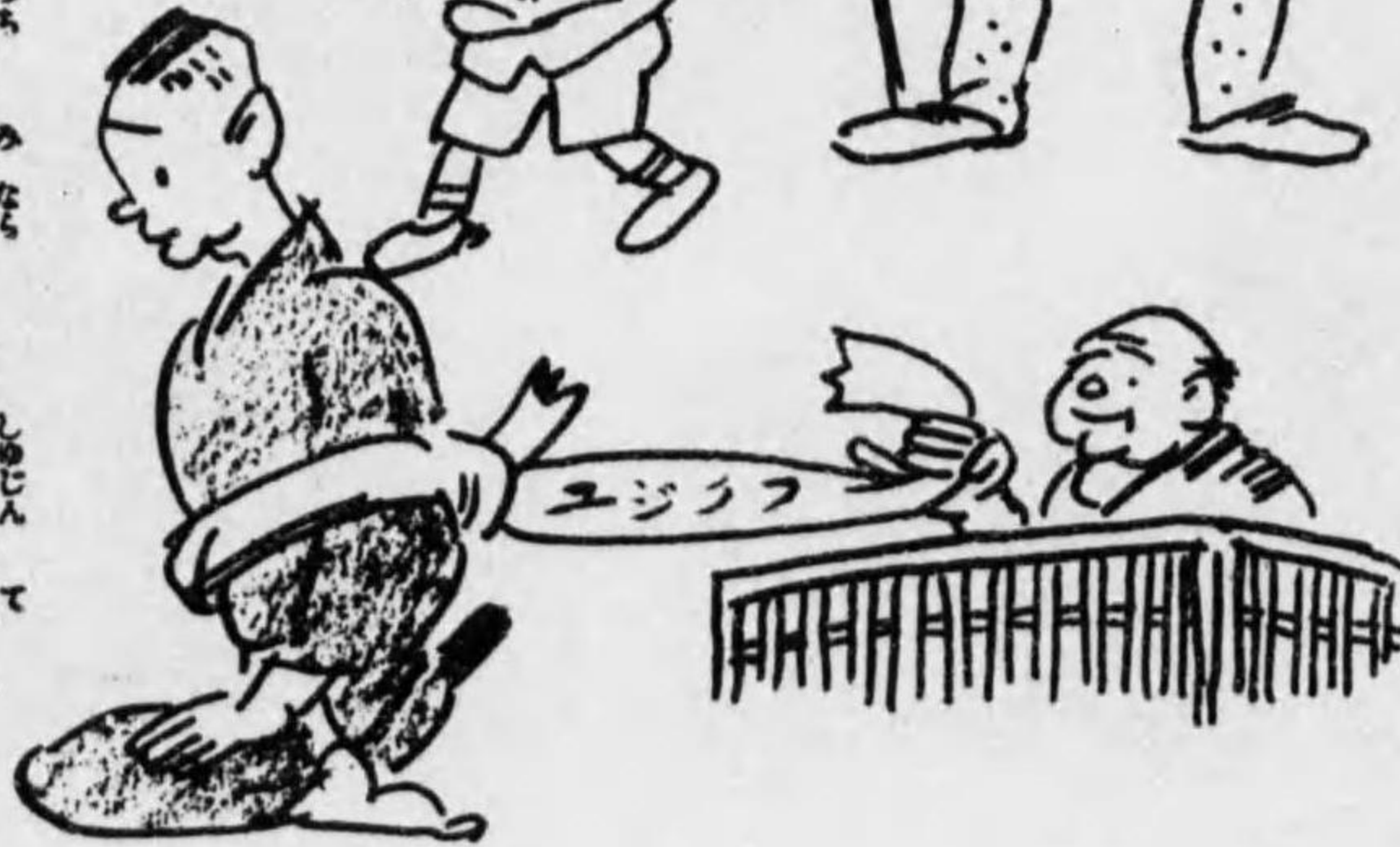


嬰兒まいじは母ははの手に

學がくに就ついて教師けうしの手に



實地じつちの見習みならひひには主人しゆじんの手に



のは、この束縛そくはくの軌道きだうから脱だつしたからである、

吾人わじんの一生いせうは束縛そくはくである、ある束縛そくはくから脱だつして次の束縛そくはくを受ける、自由じゆうや解放かいほうを求めらるには此束縛そくはくから脱だつせねばならぬ、自由じゆうや解放かいほうの文字もじに懂きがれる人等ひとらの多くが長ながへに社會しやかいに容いれられぬ

(2) 向下的の樂歡



(1) 向下的の樂歡



民の國に宗の外の拜は



日本固有の
琴三味線を
低級音楽と
蔑視し、

西洋楽器を崇高
な音楽と尙び、

舶來品を優良品の代名詞
と定め自國
製劣等品
と假定す
るのは、
日本ばかり
だ、

(3) 向下的の樂を歡ん



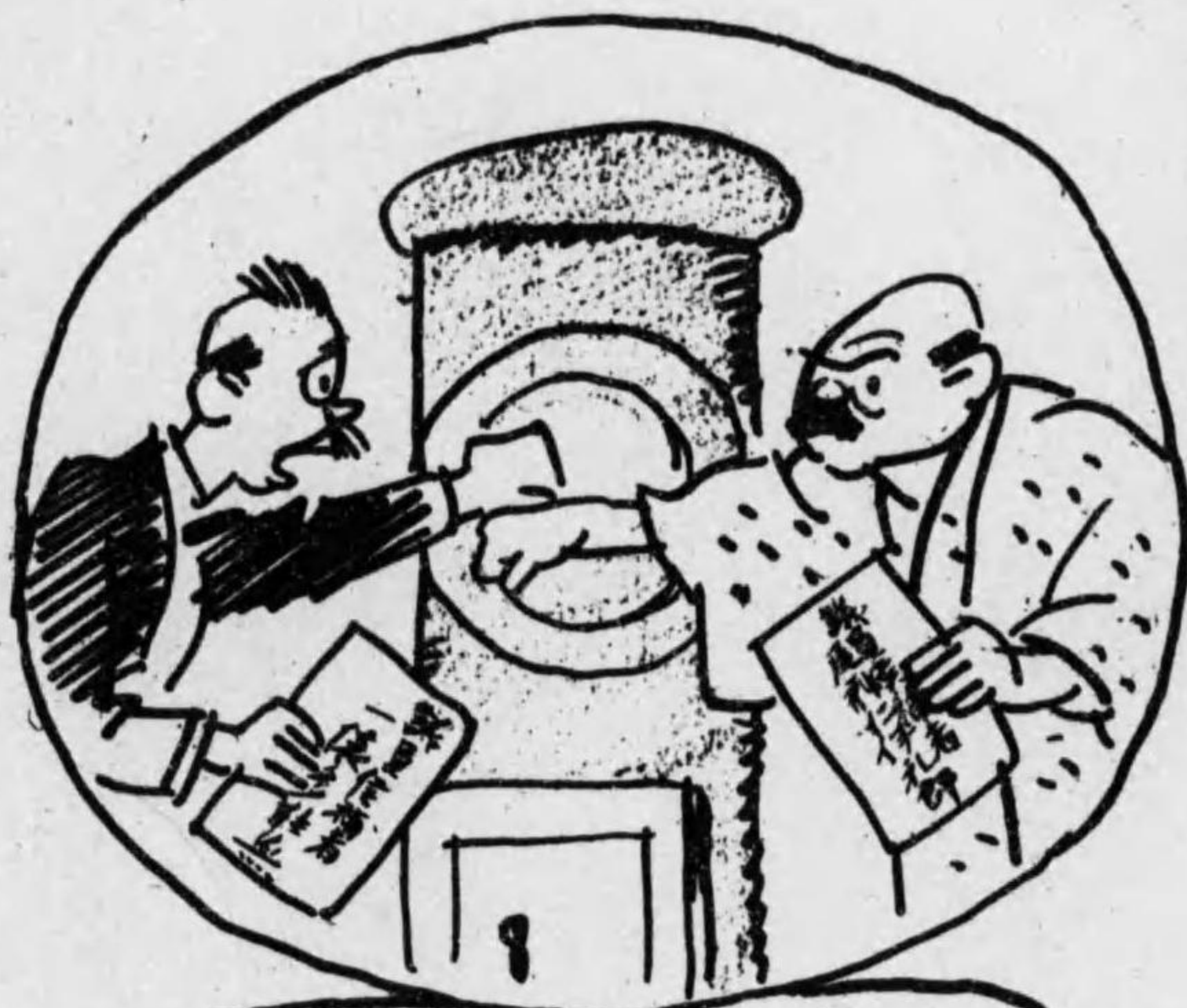
千圓貯つた時の嬉しさが、一萬二萬と
桁が増すほどに嬉しさの程度が薄らい
てゆく、



夜も飲み、晝も飲む、
行きつく處は耽溺で
ある、靡爛である、
衰滅である、

酒一杯を飲む、一杯は美味い、更に二杯を飲む、
三杯を飲む、今日も飲む、明日も飲む、

(2) 思^ひ意^いの外^が以^て己^が



我^{われ}中^{ちゆう}原^{げん}の鹿^かを狙^{ねら}へば人^{ひと}も固^{かた}じく狙^{ねら}ふ。



我^{われ}走^{はし}れば人^{ひと}も走^{はし}る。

(1) 思^ひ意^いの外^が以^て己^が



世^よの中^{ちゆう}の事^{こと}がすべ^ずて自^じ分^{ぶん}の思^{おも}ふやうにならぬのは、自^じ分^{ぶん}以^て外^がの多^{おほ}くの意^い思^しが自^じ分^{ぶん}と同^{どう}様^{やう}、若^もし
くはソ^そレ以^て上^{じゆう}に働^{はたら}いて居^ゐるからである。これあつてこそ、勵^{はげ}みも出^で來^き、向^{まう}上^{じゆう}も出^で來^きる、ソ^そレを
我^{われ}ある物^{もの}を獲^とんと焦^{あせ}れば、人^{ひと}もそれを得^えんと
焦^{あせ}りつゝある。



我^{われ}先^まきに乘^のらんと
焦^{あせ}れば人^{ひと}も同^{どう}じ
く光^{ひかり}を獲^とんと
焦^{あせ}りつゝあ
る。

不^ふ満^{まん}に思^{おも}つたり憤^{いらい}つたりする人^{ひと}は、遂^{つい}に人^{じん}類^{るい}共^{きゆう}存^{ぞん}の資^し格^{かく}な^き人^{ひと}と云^いはねばならぬ。

りな可^てし



(3) 思^いの 外^に意^いれ 己^ら



(2) 臺舞の儀士

人間はいつも土俵に立つた度胸を忘れてはならぬ。



(1) 臺舞の儀士



(2) 息^い一^いうも



剣^{けん}は竹^{たけ}刀^{ばち}を引^ひく時^{とき}が危^{あや}うく

難^{なん}航^{かう}海^{かい}を續^つけた船^{ふね}が港^{みなと}口^{ぐち}まで來^きて沈^{しず}み

岩^いに縋^{すが}つて一^{いっ}縷^{りゆう}の命^{いのち}を保^{たも}つた人^{ひと}が救^{すく}え船^{ふね}を見^みると惜^{あは}しや力^{ちから}緩^{ゆる}んで手^てを放^{はな}し

折^せ角^{かく}辛^{しん}抱^{ほう}を續^つけた子^こ供^{ども}が親^{しん}身^みの甘^{あま}い言^{ことば}葉^はからぐれ出^だし

(1) 息^い一^いうも



車^{くるま}から下^{くだ}りやうとす時^{とき}、刺^さ客^{きゃく}は狙^{ねら}ひをつける

飛^ひ行^{かう}機^きは今^{いま}や着^{ちやく}陸^{りく}せんとす時^{とき}に過^{あや}ち多^まく

折^せ角^{かく}辛^{しん}抱^{ほう}を續^つけた子^こ供^{ども}が親^{しん}身^みの甘^{あま}い言^{ことば}葉^はからぐれ出^だし

(1) 今日一日を

をこの通りに實行するがよい、



大に笑
つて暮そう

今日一日腹を立てまい



何か一ツ善い事をしやう

明日になつたらまた今日一日を、



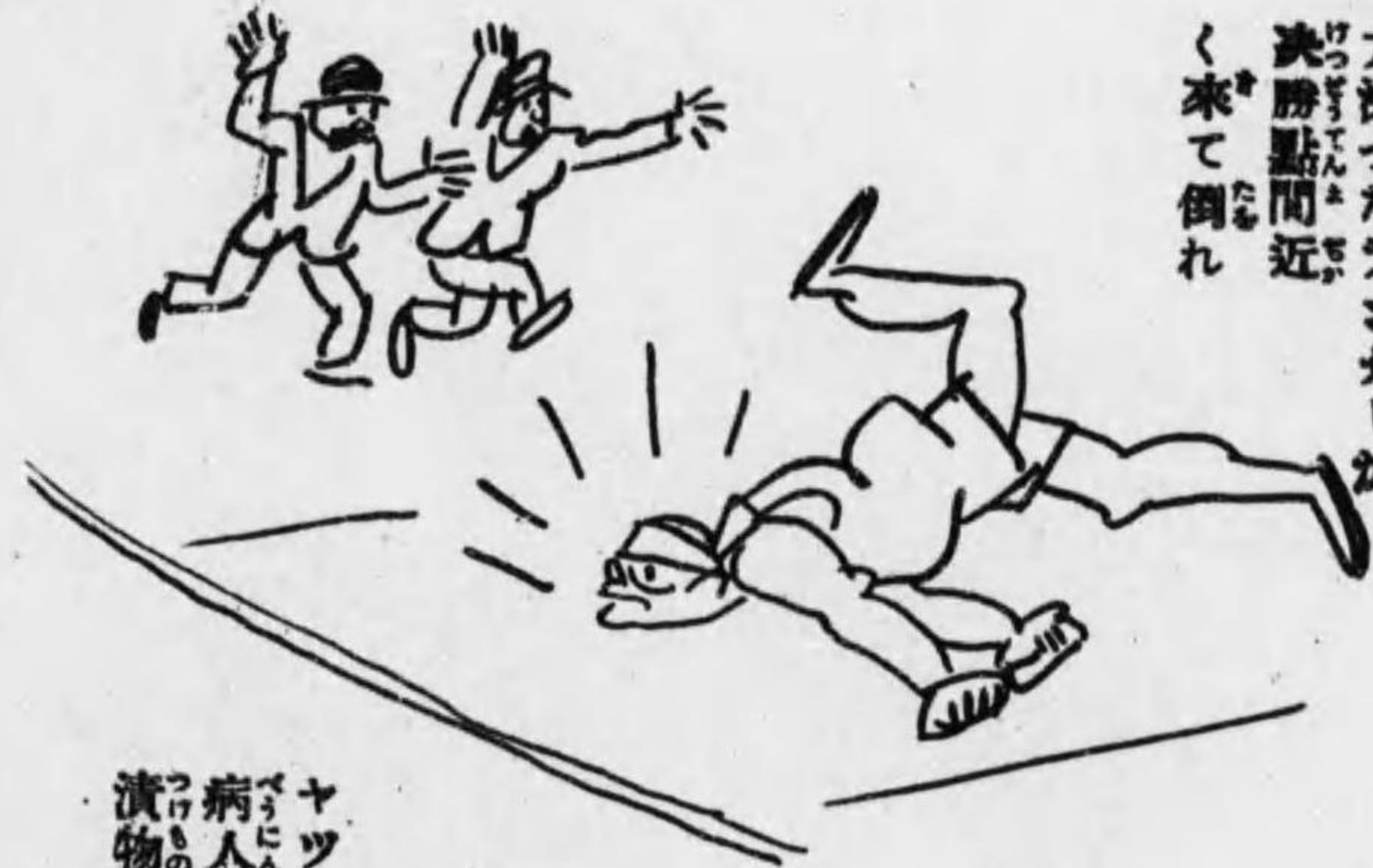
人の悪口は
云ふまい



五年禁酒シカ、生涯賭博をせぬシカの長い誓ひは危なかしい、それよりはまづ手近の今日一日

(8) もう一息

力漕つたランナーが
決勝點間近
く来て倒れ



ヤツと峠を越した
病人が僅に一片の
漬物と情死せんとし



稼ぎ貯めた卍帯を息子に譲つて
ヤレ〜と思つたらお陀佛だ、



(3) を日一日今



約束を違へまい。

人と争ふまい。



大に働かう。

(2) を日一日今



贅澤はすまい。

昨日を省みて何か間違つた事はしなかつたか。



嘘は言ふまい。



(2) しな敵るな大りよ己



法を犯して地位も名譽も捨てるのも己れ

言ひ苦い嘘を並べて信用を毀すのも己れ

瞬時を急いで大怪儀をするのも己れだ

(1) しな敵るな大りよ己



暴飲暴食してあるべき命を縮めるのも己れ

腹を立てては相手を罵り以上に歌り返へるのも己れ

甘言に乗せられて大切な親の遺産を蕩盡するの己れ

(2) てし通を符切



(1) てし通を符切



(2) 意如不



待つ側の電車は少しも来ず、向ふ側にこれ見よがしに續いて来る、かの如く感ずるのが心理状態の通性だ。



相手より弱いものは今は力及ばぬ不如意の人だが一面から見れば攻勢の好位置を占める人であつて、強い人は守勢の人だ。

(1) 意如不



思惑の失敗は砥石に掛ける刀だ、失敗を磨く度に刀は光る、

以上のない人である、なるが如く、ならざるの人たれ、



少数の聲が耳に入らず、葬むらるゝ眞理の壓迫せらるゝ中が花だ、

人事概むね意の如くならざるが幸福の人にして成るの人は頂きに達して心緩み氣奢つて、これ

(1) 漸を追へ



京染めの眞價はたいやく染めて
度敷を重ぬるほどに佳き色が出る、

一氣呵成は禁物、漸を追ふこそ、

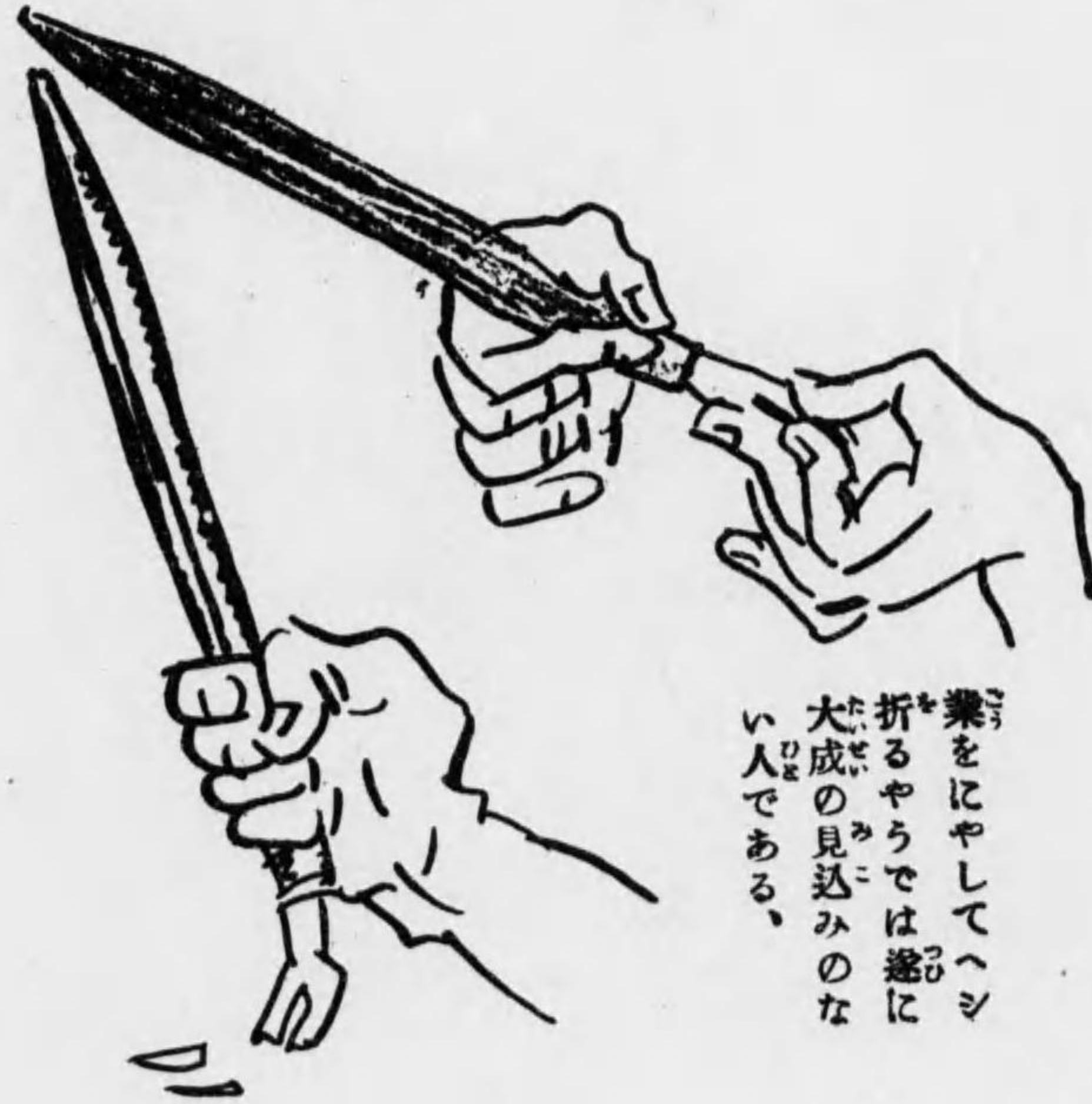


怠けた學生が試験間際の急勉強が
中々頭へ這入るものでない、

(3) 不意に



纏れた糸を解く事に依つて
其人の心事が知られ、



業をにやしてへシ
折るやうでは遂に
大成の見込みのな
い人である、

(3) へ 追^きを 漸^じ



情^{じやう}れなくした女房^{にようぼう}
の大病^{たいびやう}に驚^{おどろ}いて、
始^{はじ}めて盡^{じん}す親切^{しんせつ}は
喜^{よろこ}ばれるものでない

山持^{やまぢ}ちが植^うへる苗木^{なへぎ}の報酬^{ほうご}が孫子^{まご}の代^{しろ}になつて
やつと得^えられる遠大^{えんだい}の計^{けい}があつて欲^ほしいものだ

(2) へ 追^きを 漸^じ



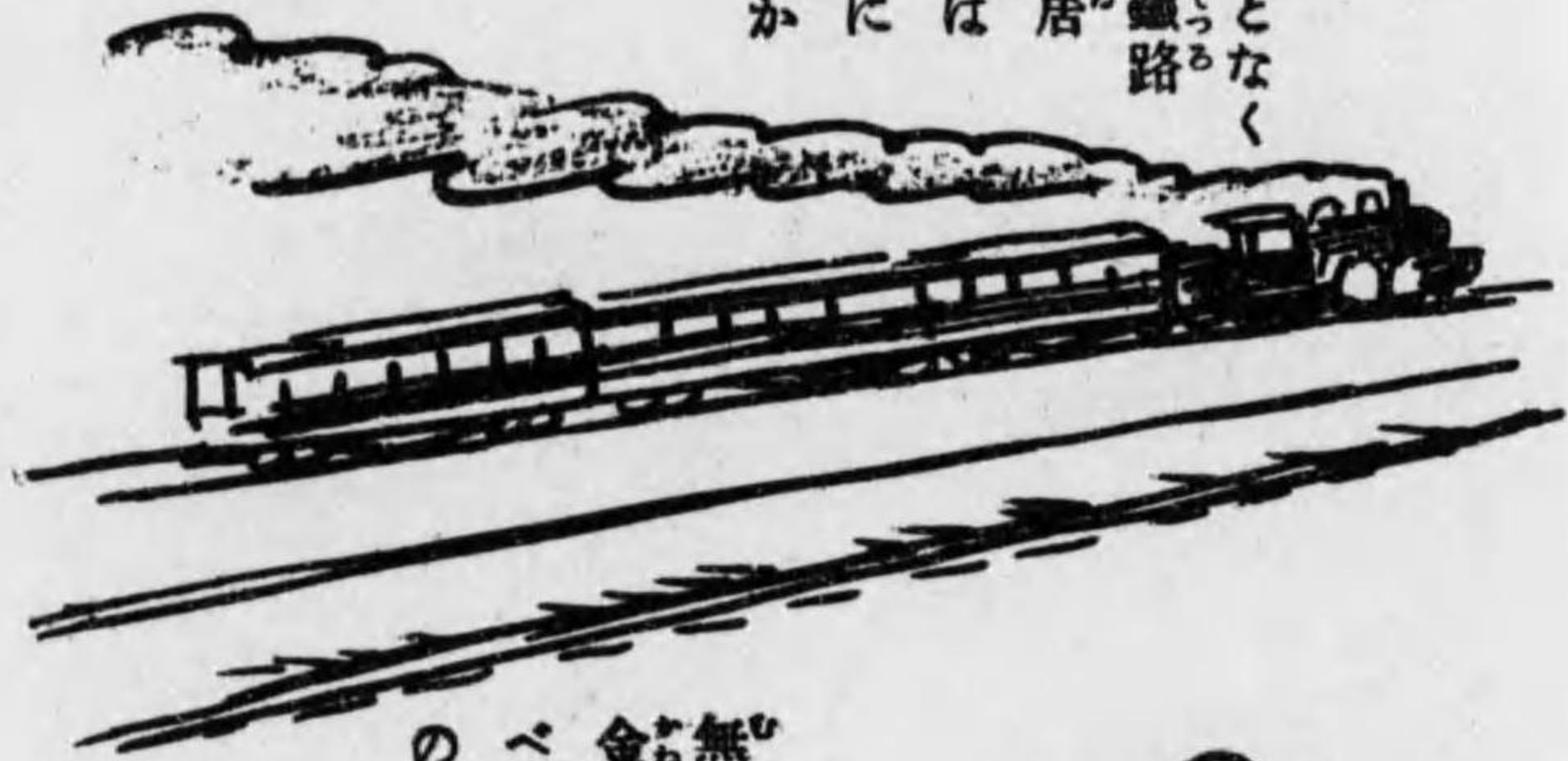
變^{かは}つた事^{こと}をして一時^{いちじ}に名^なを賣^うらうとしてもダメ
慎重^{じゆうじゆう}に度^どを重ね^{かさね}てこそ、永^{とこ}久^くに名^なは知^しられる、

一^{いっ}氣^き呵^あ成^{せい}に積^つんだ金^{かね}は
壊^{こわ}れ易^{やす}いが、一^{いっ}つら
積^つんだのは根^ね
強^{つよ}く保^{たも}つ、

毎^{まい}日^{にち}一^{いっ}度^どつ、雑^{ざつ}巾^{きん}掛^{かけ}
を^をして居^ゐると綺^き麗^{れい}な麗^{れい}
は出^でるが、一^{いっ}晝^{ちゆう}夜^やに三^{さん}百^{ひゃく}
六^{ろく}十五^{じゆうご}度^ど拭^ふき通^{とほ}しても佳^よい麗^{れい}は出^でぬ、

(2) 護保の悲慈無

日に何回となく
上を渡る
は輝いて居
るが、使は
ぬ待遊線に
は赤い錆か
見へる、



無慈悲の遺産に保護されて
金の番人を勤めさせる憐む
べき米
の虫人、



これ位ひの辛抱は當然だ
それが出来ぬやうでは
と勵ます誠の慈悲親は
少なく、辛いであらう
が辛抱せよと慰められ
るほど泣出したくなつ
て、遂に辛抱し切れず
前途を過まらせる嘘の
慈悲親多く、

(1) 護保の悲慈無

政府の保護と云ふ大きな杖に倚頼る銀行
會社が業績上からぬ不仕體は、依頼心養
成の無慈悲の保護、

己が力で漕ぎ得ずして、曳船頼む
曳かれ船の、籠が緩んで獨り
離れて役立たぬのも
好教訓、

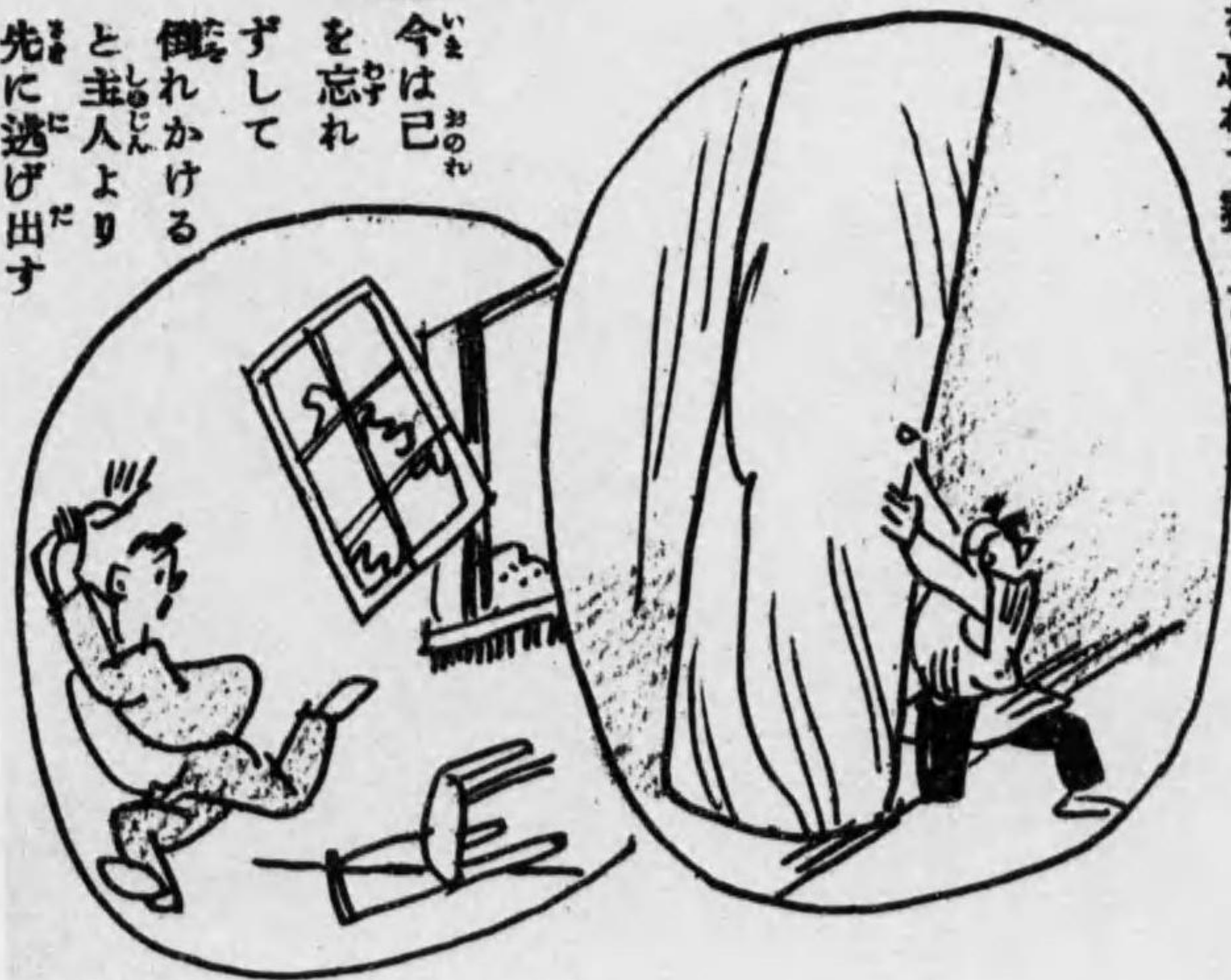


(2) よれ忘^{おのれ}を己^{おのれ}



今は犠牲者
を出さぬと
の口約を取
つて代表する

昔は命を掛けて衆に代つて直訴した
ものだが、



今は己^{おのれ}
を忘れ
ずして
憐れかける
と主人より
先に逃げ出す

主家の爲には己^{おのれ}を忘れて盡したのが、

(1) よれ忘^{おのれ}を己^{おのれ}



これを仕上げ
れば幾らにな
ると己^{おのれ}を忘れ
ずして名作は
出来ぬ

己^{おのれ}を忘れ
てこそ名
を残す作
品が出来
る、



特授をす
れば自宅
への届け
物がと、
我を忘れ
ぬ先生多
く

人を教へるにも何人でも傑
い人に仕
上げてや
りたいた
我を忘れ
て教へた
ものが

昔の人は己^{おのれ}を忘れよき教へたが、今の人は己^{おのれ}を忘るなき教へた、